～複言語・複文化教育と
東アジア共生の可能性２～

2018年度

第13回日韓大学生国際交流セミナー報告書

主催　お茶の水女子大学日本語教育コース
グローバル文化学環・国際教育センター
協力　韓国・釜山外国語大学校

釜山外国語大学校

日本語教育実習修了式

塩谷さん

高橋さん

安食さん

池田さん

榎本さん

高坂さん

矢動丸さん

華さん

国際学生フォーラム

目次

第 13 回日韓大学生国際交流セミナー概要（森山新）…… 1

参加学生の修了レポート …… 4

学生が作成した教案…… 34

第 2 回日韓学生フォーラムハンドアウト（森山新）…… 84

総評（森山新）…… 91

編集後記…… 93

第 13 回日韓大学生国際交流セミナー概要
～複言語・複文化教育と東アジア共生の可能性２～

森山新（お茶の水女子大学）

1. 概要

日時　2018 年８月６日（月）～９月 15 日（土）
場所　釜山外国語大学校（大韓民国釜山広域市）
主催　お茶の水女子大学国際教育センター・日本語教育コース・グローバル文化学環
協力　釜山外国語大学校

2004 年に第１回が行われ、今回が第 13 回となる日韓大学生国際交流セミナーは、本学から８名の学生が参加し、韓国の協定校である釜山外国語大学校で実施された。第 11 回までは同じく協定校である同徳女子大学校との間で、日韓両国間にまたがる諸問題を取り上げ、両国の学生が話し合いを通じ解決を目ざすという形で実施されて来た。そして戦後 70 年、日韓国交回復 50 周年を迎えた 2015 年度の第 10 回セミナーにおいて、両国の学生が戦後 70 年日韓学生共同宣言を発表、両国が過去を直視し、互いが納得のいく議論の下、真の未来志向の関係を構築するまでに至った。また 12 月には日韓文化交流基金の助成のもと、35 名の学生を連れて韓国の同徳女子大学校、啓明大学校、釜山外国語大学校を訪れ、戦後 70 年を記念し、４大学合わせて 150 名近くの学生が集い、国際学生フォーラムを開催、日韓両国の過去（同徳女子大）、現在（啓明大）、そして未来（釜山外大）を語る場を持つことができた。

このような成果のもとで、2016 年度からは、同年に協定を締結した釜山外国語大学校が実施する韓国語・韓国文化を学ぶプログラム（韓国語短期研修）と、日本語・日本文化を教えるプログラム（日本語教育実習）とを合体することで、新たな理念のもと、「複言語・複文化プログラム」を構築し、日韓大学生国際交流セミナーは言語・文化を越えたシティズンシップ、国家を越えたインターナショナルなアイデンティティ形成、そしてそれに基づいた東アジアの共生に向け、より高い次元に向かってさらなる一歩を踏み出した。

今回はその第３回目として、８名の学生が本プログラムに参加した。８月６日から 25 日までの３週間は韓国語研修に参加、韓国語・韓国文化を学ぶとともに、決定した指導教員とのコンタクトを開始し、後半の日本語教育実習に備えた。９月２日から 14 日までの２週間はそれぞれの指導教員のもと、日本語教育実習に参加、日本語と日本文化を教える体験をした。さらに９月７日には「第２回日韓学生フォーラム」を開催し、日韓の学生、そして今年は中国の学生も加わり、東アジアの過去、現在、未来について率直な対話の場が持たれ、日韓、そして東アジアは対立から共生へ重要かつ具体的な第一歩を踏み出した。

なお、本プログラムは、学部生は「日本語教育法演習Ⅰ・Ⅱ（日本語教育副プログラム）」「多文化交流実習Ⅰ・Ⅱ（グローバル文化学環主・副プログラム）」を、大学院生は「日本語教育方法論演習」を履修して参加した。４月に参加者を募集し、５月～７月には毎週事前学習を行った。３か月間の事前学習では、本複言語・複文化プログラムの理念である「複言語・複文化主義（plurilingualism, pluriculturalism）」、「インターカルチュラル・シティズンシップ教育（intercultural citizenship education）」としての外国語教育を学び、その上で釜山外国語大学が採用している「ヨーロッパ言語共通参照枠（Common European

Framework of Reference for Languages）」や「CAN-DO ステートメント」を紹介、それらに基づいた具体的な教案作成の方法などを学び、実際の教壇実習に臨んだ。

残念ながら東アジアにはヨーロッパのようなともに生きるための地域連合体もなく、それをめざすための教育理念も教育政策もない。そのような中、釜山外国語大学の協力のもと、本学が歩み始めた本プログラムが、対立の多い日韓、そして東アジアに、和解と共生をもたらす第一歩となれば幸いである。

なお、本プログラムは日本学生支援機構の短期派遣プログラム、およびお茶の水女子大学奨学金などの支援を受け、学生が派遣されている。

2. 日程表

月日（曜日）	複言語プログラム	複文化プログラム
４月	説明会・参加者募集	
５月～ ７月	事前学習（毎週月曜９-10 時間目）	
８月 ６日（月）	訪韓・入寮	
８月 ７日（火）	韓国語研修入学式 レベルテスト	交流会
８月 ８日（水）	韓国語授業開始（～24 日）	キャンパスツアー・南浦洞観光
８月 ９日（木）		韓服体験・gangeolot 観光
８月 10 日（金）		K-POP ダンス・韓国歌謡
８月 11 日（土）		K-POP ダンス・韓国歌謡
８月 13 日（月）	韓国人学生とのプロジェクトワーク	
８月 14 日（火）		韓国映画鑑賞
８月 15 日（水）		太宗台・海洋博物館　観光
８月 18 日（土）		韓国料理体験・冬柏島（APEC）観光
８月 20 日（月）		広安里観光
８月 21 日（火）		文化探訪：慶州（１泊２日）
８月 22 日（水）		文化探訪：慶州（１泊２日）
８月 23 日（木）	韓国語試験	
８月 24 日（金）	韓国語研修修了式	送別会
８月 25 日（土）	自主学習・指導教員との事前ミーティング（～８月 31 日）	
９月 ２日（日）	日本語教育実習開講式	
９月 ３日（月）	授業見学開始（～７日）	
９月 ７日（金）	第２回日韓学生フォーラム	
９月 10 日（月）	教壇実習開始（～14 日）	
９月 14 日（金）	日本語教育実習修了式	
９月 15 日（土）	帰国の途へ	
９月 28 日（金）	参加者報告書提出	
10 月 24 日（水）	インターナショナルデーにて実習報告会開催	
12 月 24 日（月）	報告書完成	

3. 実習日程

月日	曜	11:00	12:00	13:00	14:00	15:00	16:00	17:00
９／３ ９／10	月		安食 華	安食 華		塩谷 矢動丸	塩谷 矢動丸 榎本	榎本
９／４ ９／11	火		池田	池田 高橋	高橋			
９／５ ９／12	水		安食 華	安食 華			高坂	高坂
９／６ ９／13	木		榎本	榎本	矢動丸	池田 矢動丸	池田 塩谷	塩谷
９／７ ９／14	金	高橋	高橋		高坂	高坂		

注）下線は森山が参与した授業をさす

4. 参加者

氏　　名	所属・学年	韓国語クラス	日本語クラス	実習指導担当教員
塩谷美咲	文・言語文化学科（グロ文）３年	レベル２	A2	根本尚子
高橋もゆ	生・人間生活学科（生活文化）２年	レベル２	A2	佐藤葉月
安食礼子	文・言語文化学科（グロ文）２年	レベル１	B1-1	二色博樹
池田百合香	文・言語文化学科（仏文）２年	レベル２	B1-1	堀　浩子
榎本愛子	文・言語文化学科（グロ文）２年	レベル２	B1-1	二色博樹
高坂千尋	文・言語文化学科（グロ文）３年	レベル２	B1-2	小林安那
矢動丸咲季	文・人文科学科（グロ文）２年	レベル２	B2-1	松浦恵子
華靈鈺	院・日本語教育コース M1 年	レベル１	B2-1	松浦恵子

注）韓国語研修クラスはレベル１（初級）～５（上級）に分かれ実施されている。

5. スタッフ

大　　学	名　　前	所　　属	役　職
お茶の水女子大学	森山　新	グローバル文化学環	教員
お茶の水女子大学	成　　歓	大学院人間文化創成科学研究科	院生
釜山外国語大学校	松浦恵子	日本語創意融合学部	教員
釜山外国語大学校	二色博樹	日本語創意融合学部	教員
釜山外国語大学校	堀　浩子	日本語創意融合学部	教員
釜山外国語大学校	小林安那	日本語創意融合学部	教員
釜山外国語大学校	佐藤葉月	日本語創意融合学部	教員
釜山外国語大学校	根本尚子	日本語創意融合学部	教員

【参加学生の修了レポート】

隣国と、自分と向き合うきっかけに

1. 韓国のことばと文化を学んで

前半３週間の韓国語短期課程では、韓国のことばと文化を同時に学んだ。得るものが多かった分、ことばや文化を吸収する際の不和やストレスも大きかったように感じている。ここでは、具体的にどのようなこと（言語、文化、生活面）を学んだか、そしてそれに伴う感想などを述べたい。

まず、ことばについて。独学の結果、ハングルが中途半端にしか読めなかったこともあり、ハングルの文字など基礎的な部分より学んだ。正直、韓国語の授業の一週目はストレスでしかなく、フラストレーションが溜まっていた印象が強い。というのも、自分以外のお茶の水女子大学生や他学生らが韓国語の勉強を以前より進めており、同じ土俵に立てていなかったからである。自身の努力不足、そして韓国語学習へのモチベーションがいかに低かったかを再確認した。また、初級者に対しても直接教授法（韓国語を韓国語を使用して教える）であったことも、ストレスが溜まる原因であった。これまで、外国語を学ぶにあたって、言語の土台となる部分はいつも母語である日本語で教わっていた。ゆえに、その後外国語の授業が直接教授法に転換しても、授業中に先生の説明が何もわからないという経験が無かったのだ。今回、初めて授業の内容が殆ど分からないという経験をし、混乱と苛立ちを覚えた。このことについても、事前学習を綿密に行っていれば防げただろう。２週目になってからは、テキストを自分で予習・復習するなどして授業の内容にどうにかついていけており、最終テストでも９割程度理解できていた。思い返してみれば、１週間目に経験したフラストレーションが韓国語学習の原動力に繋がったのかもしれない。ただ、苛立ちを露わにしていた実感があることから、先生陣にもあまり良い印象を与えていないだろうし、授業外の時間にも影響が出てしまっていた気もする。できれば、基礎的な土台となる部分は完全な直接教授法を避けて頂けたならば、より学び易かった。

次に、文化について。これまで、特に韓国文化（K-POP などを含め）に一切の興味・関心が無かったために、想定していたものとは違う、新鮮な体験ができた。しかも、文化体験の多くは、韓国の大学生パートナーと訪れるものだった。同世代の意見（若者の間で何が流行っているのかなど）を聞きながら、各所を訪れることは、ただ旅行で韓国を訪れる際とは異なり、貴重な体験ができたと感じている。様々な観光地や文化的建造物を訪れ、各観光地の雰囲気が日本と大差無いことを確認した。同時に、日本の観光地と類似していながら（韓国から日本にもたらされたものゆえ当然だが）も、色使いや装飾品、そこに住む人々のあり方などが異なり興味深かった。K-POP については、自身があまり馴染み無かったこともあり、最大限に楽しむことはできなかった。反面、韓国映画の鑑賞がとても印象に残っている。釜山外国語大学校に大きな視聴覚室があったことも驚きだったが、複雑な感情の機微を描いた韓国作品特有のストーリーにとても満足した。同時に、韓国・日本・チェコ（チェコからの大学生も研修に参加していたこともあって）が一つの映画の中で繋がっていたことに感銘を受けた。政治的描写なしに、数カ国をつなぐことができる映画の偉大さ、他国の文化を理解するにあたって映画が効果的であることに気づいた。

さらに、生活面についても少し言及しておきたい。韓国の文化の中でも、食文化・生活リズムが日本のものと大きく異なるように感じた。１つ目の食文化だが、日本のものとは違い少し苦労した記憶がある。全体的に味付けが辛く、ご飯選びが少し大変だった。ただ、前半の研修のパートナーや後半の実習のチューターなどと様々なお店を訪れるにつれて、

段々と辛さにも慣れることができた。初めは、驚いた味付けも、長く滞在するにつれてそれが当然となり順応していったのだ。また、韓国にはお洒落なカフェやスイーツを取り扱っているお店が比較的多く、自身のような女子学生には暮らしやすい場所であると感じた。２つ目の生活リズムについては、日本の大学生よりも遅い時間まで活動していることがわかり、韓国の大学生の生活リズムへの順応にも少し苦労した。自身は、日本では大学生にしてはかなり早い門限のある家庭であるため、特に韓国人学生の生活リズムに合わせるのには少し戸惑いがあった。日本での生活とは違うものとはじめから覚悟を決めた上で研修に望むべきだったと反省している。

最後に、韓国のことばや文化に触れたことの感想をまとめておく。韓国文化に一切興味のなかったところから、少し触れたことで興味が少し湧いた。また、事前知識の乏しい状態からことばを学ぶことへの弊害やストレスを知り、今後自分や他者がそのような経験にぶつかった時にどう対処できるか考える必要性を感じた。

2. 日本語教育実習

副プログラムが日本語教育ではないということもあり、これまで「日本語を教える」ことを深く勉強し、直接向き合ったことが無かった。そんな中でも、多くのことを吸収し、自己を振り返った上で、様々なことに気づくことができた。

まず、これまでは考えることのなかった、ことばを直接教授法で教えることのメリットや難しさ、限界を考える良い機会となった。自分の母語を通して教えることが出来るのだから、イントネーションや発音、実際にことばが今どのように使われているかなどの感覚的・ニュアンス的な部分はより現実性をもって伝えることが出来る。同時に、母語を通して日本語を教えるのだから、間接教授法よりも（自分の経歴・背景などの）オリジナリティを出しやすいなと感じた。実際に、自分も授業を行なった際には、音読を多く取り入れたり、ことばの使われ方などのより文化的側面も教えられたりするように努めた。というのも、自身が中学の頃より所属していた部活の関係上音読が得意であり、また自身も日本のアニメや漫画に強い関心があるからである。また、直接教授法で授業を行うことで、ただの講義であったとしても、生徒たちにはリスニングの一環となり、頭を常に働かせながら授業に臨むことが出来る。自身が韓国語研修に参加した際にも、普段の大学の授業とは違い、授業に追いつくために集中して聞かねばならないという切迫感があった。一方で、直接教授法の授業を見学し、実際に自分で実践することでその難しさを同時に痛感した。新出の語彙や表現などを、クラスに在籍する全生徒が理解できるような説明を日本語で行うことが極めて難しい。諸先生方の授業では、韓国語で補っている場面も多々見られた。直接教授であったとしても、学習者の言語を習得することでさらにスムーズに教えられることが分かった。さらに、日本語ネイティブが日本語文法を日本語教育的知識無しの感覚のみで教えるには限界があることにも気づいた。自分が、教壇に立ち、日本語の表現などを紹介する際に、日本語の構造などの知識が不足していたため、曖昧な説明にとどまってしまった。日本語ネイティブといえども、日本語教育をする上での知識が必要不可欠だと気づいた。ネイティブではないアクターの目線に立ち、さらに配慮出来るようにならねばと考えさせられた。

次に、実習を通して、自分がどのような人物か、そして自分の長所や短所などを振り返る機会が豊富にあった。１つ目に、イラストやデザインに関心があることを再確認し、それが強みになるのだと分かった。授業で使う配布プリント・スライドのレイアウトやフォント、色使いなどに気をつけた。さらに、もともとイラストを描くことが好きだったということ、先生に助言を頂いたこともあり、授業配布プリント用のイラストを何枚か描いた。この両方とも、学生たちからは良いリアクションがあった印象がある。ここから、デザイ

ンやイラストに気をつけることが、教育を行う上でも一つの強みになるのだと実感した。２つ目に、自身がハキハキと話せていることやダイアログなどの簡単なやりとりをスムーズに書くことが出来ると分かった。これは、先述にある中高６年間所属していた部活に起因している。勿論、先生は教室の奥にいる学生にもはっきりと聞き取れるような声で話さなければならない。同時に、日本語教師である以上、標準的な日本語に準拠したイントネーションに気をつけなければならない。また、現実味がありながら、日本語の表現などを学ぶことのできるダイアログを即座に作ることが出来ることも強みと言えるはずだ。３つ目に、自分で全てを行ってしまおうとすること、全てを完璧に行おうと考える癖があることに気づくことができた。教案とは別に、分刻みの進行表を作成したり、早めに授業準備を終わらせることができたりとこの性格のおかげで助かった部分も大いにある。同時に、授業においては、一人で授業を行おうとしてしまい、学生とのコミュニケーション・交流がおろそかになってしまった。学生との信頼関係を築き、学生からのレスポンスを待つことも先生になるためには必要なのだと痛感した。以前より、自身が完璧主義的思考に陥りがちなのは理解していたつもりだったが、今回の実習を通して注意すべき自分の癖として認識することができた。以上に挙げたような強みは教育の場に限らず、様々な場において活かしていけると考え、気づかせてくれた先生方にはとても感謝している。同時に、気をつけるべき自分の癖を知り、他の活動を行う上でも注意していきたい。

日本語教育を考え、実際に教壇に立ったことで、日本語教育の難しさや学生たちを通して自分自身をさらに深く知ることができた。他の実習生の多くは、これまで学んできたものを活用する集大成としてこの日本語教育実習に臨んでいた印象がある。対して、自身にとってはこの実習が日本語教育に触れるスタート地点だった訳である。その分、多くのことを吸収し、気づくことができた、濃密な２週間だった。

3. 複言語・複文化プログラムについて

以上２種類の研修および日韓学生フォーラムを踏まえて、プログラムの長所や限界について考える。

まずは、プログラムの長所を述べていこう。１つ目に、韓国や日本に対する理解が深まった。韓国のことばや文化をゼロから学び、実際に肌で感じることで韓国に対する理解が深まったことは自明である。同時に、自分の母語を振り返り、日本文化が韓国でどのように受け止められているかを知り、自分の出身国を客観的に理解することに繋がった。パートナーやチューター、フォーラムで意見交換をする中で、教科書では計り知れない若者目線の韓国情勢や、日本に興味のある学生から見た日本について生の声を沢山聞けた。２つ目に、２つのプログラムを経験したことで、学生の持つバックグラウンドや学生の視点を理解した上で教壇実習に臨むことができた。韓国語や韓国の文化を勉強したことで、休み時間などに実習担当の学生が話している内容が若干理解できたのは良かった。また、直接教授法で外国語を学習する難しさや辛さを知っており、自身も一人の外国語学習者であるので、日本語学習者の立場を理解して（真摯に向き合った上で）教壇に立つことができた。それゆえ、ただ日本語教育プログラムに参加するよりも学生の立場を考え、より対象者を理解した上で実習に臨めたのではと考える。

次は、プログラムに参加するにあたって感じた限界や改善できる点を考える。１つ目に、プログラムの内容が盛りだくさんとなってしまい、期間がどうしても長くなってしまうことだ。自分自身も、１ヶ月半に及ぶプログラムに本当に参加すべきか、最初は悩んだものである。より、多くの学生に日韓・東アジアの共生について考えてもらうことを考えると、あまり手軽なプログラムとは言い難いかもしれない。２つ目に、韓国語の勉強と日本語教育実習を合体させたプログラムであったからこそ、前もってそれぞれについて学習する機

会が少なく、知識・関心の欠如が顕著だったことが挙げられる。例えば、お茶の水女子大学生全般に言えることとして、韓国の若者文化（K-POP など）に疎かったことがある。韓国語プログラムに参加していた他学生の多くは、韓国が好きだから韓国語を学びに来たという印象が強かった一方で、お茶大生にはそこまでの思いがあまり見受けられなかった。また、日本語教育においても、もちろん日本語教育を専攻しているわけではなく、日本語教師を絶対的な将来の目標として掲げているわけでもない。プログラムに、どのようなモチベーションで臨むのか、その設定が非常に難しかった。そのため、事前学習をさらに密に行う、プログラムの意義付けを明確に行う必要性があると感じた。３つ目に、自分自身と韓国人学生のお互いの語学力不足より、より深い対話に至れなかったことである。ただ、日韓学生フォーラムでは、歴史問題などのセンシティブな内容に比較的踏み込めた実感がある。というのも、共に話した韓国人学生の方々の語学力があったからである。それでもやはり、１時間強という短い時間での話し合いは、森山先生の授業「言語と文化」に比べて物足りなさが残った。日韓・東アジアの共生のための相互理解は一朝一夕で出来るものではない。今回、フォーラムで交流した学生とは、連絡先を交換し、交流を継続すべきだったと後悔している。

最後に、今回のプログラムを総括する。複言語・複文化プログラムを通して、韓国に対しての理解を深め、韓国語研修のパートナー、日本語教育実習のチューターや教壇実習で交流した学生など沢山の韓国人の知り合いができたことは収穫である。今回知り合った方々の多くとは、まだ連絡を続けている。今後、個人の趣味などだけではなく、韓日間の対立など真面目な話もできるのではと期待している。また、日本語教育を通して、自分自身や自分の持つ背景を振り返る良い機会になった。日本人としてのアイデンティティが強まった実感がある。一方で、自分自身、プログラム参加前より韓国に強い興味がある方ではなかったので、韓国語研修において自身のアイデンティティの変化を促すほどの強い刺激・衝撃はあまり無かった。自分がプログラムにどのような意義や志を持って臨むかによって、自己のアイデンティティに与える影響も変わってくるのだと分かった。異文化の土地に赴く時には、事前に調べ、どのような目的を持って訪れるのか明確にしたいものだ。

4. 授業「言語と文化」との関連性

本プログラムと直接は関係のない余談である。自身は、森山先生の 2018 年度前期に開講していた「言語と文化」という授業を受講し、ここでも自己のアイデンティティや東アジア圏の共生について考えた。その際に、同じグループであった、日本での留学期間を終えた釜山外国語大学校の学生と再会を果たしたのである。久しぶりに会い、お互いの夏休みに経験したこと（丁度韓国語研修と日本語教育実習の間だったので）やお互いの国の中学・高校時代の話などの両国の教育事情を深く話すことができた。授業受講時よりも、相手の話にレスポンスしやすかった印象がある。というのも、私自身が韓国文化を僅かながら吸収し、相手への質問の引き出しが増えていたからである。異文化間での対話を果たすには、まず相手の文化を知ることが肝要であると再確認した。確かに、話し手も、聞き手が自分の出身国の文化に理解がある方が話しやすい。

相手と世間話のその先の深い話をスムーズに行うには、相手の文化を知り、信頼関係を築く必要がある。そのため、相互理解は、長い目で見るべきなのだと改めて感じた。

複言語・複文化プログラムを通じて

1. 韓国のことばと文化を学んで

８月６日から約３週間行われた韓国語短期研修では、韓国語会話・実践的韓国語の授業を受けると同時に、教室内の授業だけではなく韓服体験や韓国料理体験、K-POP ダンス、歌、韓国映画鑑賞など課外活動を通じて韓国語に触れることができた。渡航以前、私は韓国語の読み書きができる程度であったが、これまでに本格的な勉強をしたことがなかったため、実際に授業を受けることは新鮮であった。韓国人の先生から釜山の方言なども含めその地で使われている言語を学ぶことができたことは、とても良い経験であったと同時に、Speaking と言われても名前、出身、年齢など基礎的なことを話すことが精一杯であった初日から、日数を重ねるうちに、お店の注文ができるようになったことや自分の感情を伝えることができるようになったことは大きな変化だと感じる。

その国の言語を現地で学ぶことの利点に、その言葉が実際にどのように使われているか知ることができることがあると思う。自分が解釈した意味が正しいか、また場面や状況に応じてどのような言葉が使われているか肌身で感じることができる。その面でも、教室での授業のみならず様々な課外活動を通じて韓国語に多様に触れることができたことの意味は大きい。嬉しいことにアクティビティーの時間には、同年代の釜山外国語大学校の学生さんがパートナーとして一緒に過ごす時間が設けられていたことが多く、釜山の街を共に楽しむこともできた。日本人同士で時間を過ごすだけではなく、韓国人パートナーが同行してくれたことで、その場所に関する知らない情報を知ることができたことや、基本的な会話は日本語であったものの、韓国語を少しでも実践的に使用する場面となったことは、とても良かったと感じている。

韓国に滞在してから約１週間後に８月 15 日を迎えた。日本では終戦記念日としてこの日が毎年迎えられ全国戦没者追悼式が行われるが、韓国でこの日は、日本の支配から解放された日とされており、街に出かけると多くの韓国国旗が掲げられていた。この話をパートナーにしたところ、昔は各家庭の家でも掲げることが一般的であったと教えてくれた。同じ８月 15 日であっても、立場が違えば考えも異なり、その捉え方も異なるのだということを実感した日であった。

韓国語研修が終了してからの１週間の自由時間のうち、一緒に行っていたメンバーと共に数日間をソウルで過ごした。あいにくの雨の中であったが、景福宮や昌徳宮などの建造を訪れ、歴史を感じることができたことや新村・梨大で韓国の若者ファッションを楽しむことができたことは楽しい時間であった。それと同時に、ソウルにいる友人と再会ができたことや、DMZ を訪れその緊迫した空気に包まれた環境をメディアを介してではなく、実際に感じることができたことは、ソウルを訪れた意義の１つでもあったと感じている。

大学がまだ試験期間中であった期間に韓国に飛び立ち、時間を過ごしていた最初のうちは、正直時間の流れがゆっくりであると感じていたが、振り返ってみると、とても短い時間であったと確信している。３週間を通じてコーディネーターの方々やパートナーを含めたくさんの人に出会い、忘れられない思い出を作ることができたことはもちろん、スタッフの方々が少しでもこのプログラムが良いものになるように取り組んで下さったことに感謝の気持ちで一杯である。

日本で暮らしていると一般的に世の中に溢れる情報の中から韓国を知り、そこから何かしらのイメージが形成されることが主である。しかし、このプログラムを通じ韓国で時間を過ごしながら、韓国のことばや文化を学べたことにより、その情報を吟味することので

きる機会に繋がったことはもちろん、実際にその地を訪れ学ぶことの大切さを感じることができた。

2. 日本語教育実習

日本語教育実習では前半の時間は、釜山外国語大学校日本語創意融合学部の先生方が行う授業の見学、及び後半に行う教育実習の教案、資料作りを担当の先生にアドバイスを頂きながら行なった。釜山外国語大学校の日本語教育の特徴に Can-do の概念に沿って授業が行われていることがある。この Can-do の良さとして、達成目標が同じであってもそのアプローチは様々あるという点がある。そのため、授業見学に行った際にも同じカテゴリーを教えている授業であっても先生により、その Can-do を達成する方法は様々であった。使用する教材や資料、進め方が異なるのはもちろん、使用する文法や語彙もクラスによって異なった。それに伴い、同じレベルのクラスであっても学生のレベルは様々であり、雰囲気もそれぞれのクラスの特徴があるということを体感した。従って授業見学の時間を通じて、教案を作るにあたり、自分はどのようなアプローチで授業を行うかを考えられ、その多様性を学ぶ時間になったと感じている。

アプローチが「自由」であることは、「マニュアル化」されていることより、ある意味難しいことである。なぜなら、教師の独自性や独創性が求められている上、実際に授業を終えてみなくてはそれが良いアプローチであったのか、もしくは検討すべき点があったのかが分からないためである。そのため、本格的に日本語教育実習に向けて教案作りや授業資料を作成するにあたり自分はどのようなアプローチで授業をするのか、教師的目線と学生的目線の両方の視点から時間を掛けて考えることを大切にした。８月に韓国語や韓国の文化について学んだことが「学生的視点」を考える上で大きく影響したと感じている。韓国語の学習者としての経験があるからこそ、どのようなアプローチをすれば、韓国語を母語とする人により分かりやすく、親しめる内容になるかなど多面的な視点を持って考えることができたことは、前半のプログラムがあってこそだと思う。

私の授業では、50 分×４コマを１セットと捉え授業を行うこと考えたため、各回の達成目標はもちろんあるものの、４コマ全体を通じた目標も念頭にそれぞれの回の授業計画を進めた。これにより、４コマそれぞれでアプローチに変化を持たせても全体の授業に一貫性を持たせることができたため、非常に良かったと感じている。授業を行うにあたり、使用する教材や資料は何度も訂正を加えつつ自分で作成したが、これはとても労力がかかったことであった。しかし、最終的な完成形のものを担当教員の先生に提示した際に「是非この資料を他のクラスで使わせて欲しい」と仰ってくださったことは何とも嬉しいことであった。

実際に行った初回の授業では、予想していたよりも自分で話している時間が多かったことや、学生さんの一人一人の意見に耳を傾けることができていなかったことが反省点であったため、それを次回の授業では改善しようと心がけた。意識した結果、授業中に学生さんから挙げられた意見や、やりとりを大切にすることができ、コミュニケーションを図ることに繋がったと体感した。そして私は、この日本語教育実習を通じてできた宝物がある。それは、授業の最終日の最後の時間に担当の先生が行った私の「ふり返りシート」である。授業はどうであったか、良かったこと、改善点、感想など記述形式の質問を含め、クラスの学生さんが記入してくれた評価シートである。私はこの評価シートを何回読み返したことであろうか。評価シートを読む前にも、最後の授業を終えた後に数人の学生さんから「先生の授業がとても楽しかった」「日本語がこんなにも面白いのだと感じた」と言ってもらい、授業を行うにあたり頑張った時間が思い出されたことと同時に、日本語の良さを伝えることができたことに何とも言い難い嬉しさを感じることができ、あと少しで涙

がこぼれ落ちそうであった。日本語教育についてこれまで大学で学び、その学びをもとに実際に日本語を学んでいる学生さんに授業をすることができたことは、私にとってかけがえのない経験になった。

3. 複言語・複文化プログラムについて

複言語・複文化プログラムとして、それぞれ３週間、２週間の相互的なプログラムに参加していたのはお茶の水女子大学の学生のみであり、その意義は、2. 日本語教育実習の項目で述べた理由からも大きいと改めて感じた。その一方で、釜山外国語大学校で本プログラムをコーディネートして下さっている方々や携わっている学生は、全く異なっていた。「複言語・複文化プログラム」の共有が大学間で行われておらず、１週間の自由時間も複言語・複文化プログラムの一貫として設けられていたようには感じられなかった。そのため、２つのプログラムは相互的であったものの、それぞれが基本的に独立している状態であり、双方のプログラムに参加することで自分の中で互いの要素を融合させる経験や努力をすることで初めて「複言語・複文化プログラム」を感じられたというのは正直な点である。

日本語教育実習の前半の日程が終了した日に、日韓学生フォーラムが行われた。日韓学生フォーラムが行われることは渡航前に行われていた事前授業で告知されていたため、予め知っていた。このような普段は触れることができないテーマに触れることができるフォーラムに参加することは、興味深いと考える一方で、実際に参加することに不安もあった。何故ならば、相手とより深い議論をするためには、その主題に関して一定の知識を持っておくことが大切であるが、これまで日韓問題について勉強した記憶といえば世界史の時間が主であり、その他であると何か大きな問題が起こった際に、ニュースや新聞でそれらについて取り上げられているものを知る程度であったからである。また、今回のフォーラムの場合、話し合いを行うのは初対面の相手であり、恐らく参加する多くの学生がこのような議論をすることが初めてのため、自分の発言＝日本全体（の大学生）の考えとして、認識されてしまう可能性も十分に考えられることも考慮すべき点だと考えていた。このような点から不安もあり、日韓学生フォーラムをより充実した時間にするためにはどうしたら良いかと考えた結果、私は韓国にこのようなセンシティブな問題について話しても大丈夫であろう友人がいたため、日韓学生フォーラムが行われる前に、日韓問題について議論しようと提案してみた。もちろん相手がそれを承諾してくれるか定かではなかったが、何かしら学べること、感じられることがあることは確信していた。提案した最初、相手からの返事は「わかった」でも「話したくない」でもなく、「戦争していた時代のことについて話すってことであってる？」であった。その声の重みや表情からこの問題の重さを改めて感じた。私がこのように考えた経緯を話したところ、友人も理解してくれた。これまでの会話では日韓問題に関して一切話したことがなかったため、最初は不思議に感じたが議論は思いの外、とても盛り上がった。互いの立場の違いを認識した上で、１つの問題に対してどう考えているか、メディアではどのように伝えられているのか等についても話すことができたため、とても充実した時間であった。議論が佳境に入っていくに連れて、特に印象的であったことは、友人の知識の深さであった。日本の首相ＡはＸと発言したが、次の首相ＢはＹと発言し、また別の首相ＣはＸと発言しており矛盾している等、日本で政治的にどのような発言がされていたかも知っていた。また、それについて一般的に韓国人はＺのように思っているが、Ｚの意見のＰという視点については自分は反対だと思っている等の議論もでき、発展的な話し合いができた時間であると感じている。このような時間を通じて、見解を知ることや伝えることができたことは日韓学生フォーラムに向けて、良い準備ができたのではないかと自分の中でも思い、不安の要素が良い意味で少なく

なっていた。

このような経緯もあり、日韓学生フォーラムに関して想いを持って臨んでいたため当日は良かったと感じられる一方で少し残念な点もあった。良かったと感じられる点としては、日本と韓国が互いをどのように思っているのか、思われているのかについて知ることができたことであり、日本から見る韓国がこれまでであったのに対し、韓国から見る日本の視点も得られた点である。一方で、参加した韓国籍を持つ学生は、日本に対して肯定的・中立的・否定的の３つの印象があるとしたら、肯定的印象を持つ日本語能力試験N1、N2 相当を持つ学生が圧倒的であったため、互いに肯定的印象を持つ学生同士で交流を深めるのみでは、日韓問題の根本的な解決には程遠いであろうと感じた。肯定的以外のイメージを持つ学生との交流が必要とされているのではないだろうかと思う。また、全体で与えられたテーマが「日韓問題について」であり、グループによりこの問題に対して、アプローチが様々できる点は良いと感じたが、その反面、全体で意見を共有した際に１つのグループは「戦争」について、もう一方のグループは「慰安婦問題」について、「軍隊」、「スポーツの日韓戦問題」についてなど、たくさんのテーマが出すぎてしまっていたため、話し合いにまとまりが見られなかったことは残念であった。10 グループ程度あったため、全体での話し合いはグループの意見の「共有」というより「報告」になっていたと思う。このように考えられる理由として、テーマが漠然としていた以外の視点から、釜山外国語大学校の先生からフィードバックはあったものの、他の学生はどう考えたのか、先生からのフィードバックを得てその学生は新たに何を感じたのか、それを議論する時間がなかったことが考えられる。そのため、当日も話し合いの途中に時間の変動があったが、予め時間配分をする際に上記のような話し合いをする時間を設定しておくことで、より話し合いが発展的になるのではないかと感じた。

日韓そして東アジアの共生のためには国政の協力が欠かせないが、私たち学生であるからこそできることもある。それは自分の国の歴史、相手の国の歴史を理解した上で、互いを認め合う気持ちを持ち他国の考えに触れることである。若者が日韓学生フォーラムのようなプログラムに参加し、新しい視点や価値観を得られることで、その一つ一つが積み重ねとなり、長期的な将来を考えた際には国際関係の改善へ、大きな一歩に繋がることに違いないと信じている。

4. 実習を通じて

本プログラムの参加にあたり、事前授業を含めご指導頂いた森山先生、釜山外国語大学校の先生方、コーディネーターの皆様、パートナーやバディー学生の皆さんにこの場を借りて感謝申し上げます。ありがとうございました。

外国語教育と異文化理解に向き合い続けた１か月半

1. 韓国のことばと文化を学んで

前半の韓国語研修プログラムは、韓国語授業と体験型の授業の２つで構成されていた。そこで私は、韓国についての基礎的な知識を学ぶことが出来た。

韓国語授業のクラス分けで、私はレベル２のクラスに配属された。このクラスは、ハングルを読める程度のレベルの学生向けで、４月から韓国語を学び始めた私によく合っていた。この授業は、韓国語学習に対するモチベーションにだけでなく、後半の日本語教育実習にも役立つ経験となった。私はここで、「直説法のメリット」と「教師の配慮」の２つについて学ぶことが出来た。

私は韓国に来る前、外国語教育の直説法は、本当に可能なのだろうかと疑問に思っていた。なぜなら、分からない言語についてその言語を使って学んだところで、結局分からないままだろうと思っていたからだ。しかし授業を通して、直説法は十分に可能だということが分かった。

私のクラスを担当してくれた先生には、日本語を話せる先生も話せない先生もいた。しかし、授業はほとんど韓国語を使って行われた。先生はジェスチャーを使ったり、ゆっくりと区切って話したりと、さまざまな工夫をして伝える努力をしていた。また、私たち学習者の反応を見て、理解しているかどうかを確かめながら、丁寧に授業を進めてくれた。私たちが韓国語の指示を理解できていないときには、日本語を使ったり、英語や翻訳機を使ったりしていた。私たちは、先生のジェスチャーと知っている単語から、先生の指示を推測して理解することが出来た。

この経験から、私は直説法の２つのメリットを実感することが出来た。１つ目は、直説法は学習者の喜びや自信を引き出すことが出来るいうことだ。実際に、直説法の授業を受けて、先生の韓国語の指示が理解出来ていることに気が付いたとき、私は大きな喜びを感じた。

２つ目は、クラス内でお互いを助け合うようになるということだ。先生の指示がよく分からなかった場合も、学生同士で確認し合うことが多かった。そして、その活動の繰り返しが、朗らかで学習しやすいクラスの雰囲気を作っていった。

授業で直説法が効果を発揮出来たのは、教師の配慮があったからこそだろう。教師が学習者の反応を丁寧に確認し、対話をしながら授業を進めていくことが、直説法において最も大切である。ここで学んだことは、後半の日本語教育実習においても重要であった。

韓国語授業の合間の体験型授業では、釜山外国語大学校の学生であるパートナーとともに釜山の有名な観光地に行ったり、韓服や韓国料理体験を行ったりした。観光地に行くだけならば、旅行とほぼ同じであるが、パートナーが一緒であることに大きな意味があったといえるだろう。韓国の文化や言葉に対するささいな疑問について、パートナーに気軽に質問することができた。実際にパートナーとは、日本と韓国の文化の違いについてたくさん話し合った。パートナーは日本語学部の学生であったため、日本と韓国の考え方、行動の違いなどを教科書を通して学んでいた。そして、そのことに関して私たちに質問してくることがあった。私たちはその対話から、韓国と日本の違いを学ぶことが出来た。

文化の差から、すれ違いや争いが生まれる例がよく取り上げられるが、今回の研修で異文化間葛藤が生じたことはなかった。私たちは、日本人と韓国人の間には違いがあるということを前提に交流することが出来た。そして、互いの違いについて話し合い、その違いを「面白い」と思えるような文化交流が出来た。最後には、互いを友人として理解し合え

るような関係になることが出来た。これは私にとって人生における宝になった。

2. 日本語教育実習

日本語教育実習は２週間あり、前半は授業見学、後半は教育実習を行った。この２週間は、日本語教育についてこれまでで最も真剣に考えた時間であった。そして、苦い思い出も楽しい思い出も含めて忘れられないものとなった。

釜山外国語大学校では、Can-do に基づいて授業を行っている。Can-do とは、「～ができるようになる」という課題遂行能力を表しており、A1 から C2 までの６つのレベルに分かれている。１学期間の授業の中で、レベルによって６～12 個の「トピック」のもとで、それぞれ「理解」「表現」「やりとり」の３つずつの Can-do を達成するための授業を行っている。実際に Can-do に基づいた授業を見学したり実践したりしたことで、この方法は自由であり、大きな可能性を秘めていると感じた。その一方で、Can-do に基づいて授業を行うことの難しさも実感することが出来た。

Can-do の授業の特徴として、先生の個性が最大限に発揮できるというものがある。同じトピックを取り上げても、先生によって、扱う単語にも活動にも大きく差が出ていた。初めの１週間で私は、できるだけたくさんの授業を見に行けるよう計画を立てた。全部で７人の先生の授業を見学したが、授業にそれぞれの先生の個性が光っていた。パワーポイントやプリントで、イラストを効果的に使っている先生、休み時間に音楽を流す先生、文法を分かりやすく教える先生、ジェスチャーをたくさん使う先生など、さまざまな方法を使って日本語を効果的に教えていた。釜山外国語大学校では、複数の先生がさまざまなレベルのクラスの授業を担当しており、先生を自由に選択することが出来る。そのため、レベルを上げていく中で、多様な先生の教え方に触れ、学習者自身の興味を広げていくことが出来るのが大きな魅力だと感じた。

どの先生も個性的な授業だったが、見学していく中で、どの先生にも共通していた点があることに気が付いた。それは、授業の合間に学習者に質問をし、それに答えてもらうという活動があったということだ。この取り組みは、学習者の発話の機会を増やすことができる。さらに、先生と学習者、そして学習者同士の関係を作り上げる役割をしていた。

授業見学と並行して、授業プリント、パワーポイント、教案づくりを行っていった。Can-do に基づいた授業では、トピックだけが示されており、まっさらな何もない状態から、自分の力だけで授業を組み立てていった。授業内で行う活動、授業内で教える単語、文法、日本文化を自分で自由に決めることができた。これは、確かに自由で面白いが、とても難しい作業だった。私は、できるだけ学習者と対話をし、楽しみながら活動を行うことを目標に、授業の計画を立てていった。

授業計画を立てたあとも、指導教員との面談を通して、改善点を見つけていった。面談では、自分の作った教案が、実際の教壇に立った時には、あいまいで不十分なものであることに気が付かされることが多かった。ここでは、特に印象的だった指導教員による指導の一つを紹介したい。

教案には、授業内で行う活動の評価ポイントを書く欄がある。私は、音読活動の評価ポイントの欄に、「全員がきちんと音読しているか」と書いていた。指導教員はそれを見てまず、「きちんと」とはどのように音読することなのかと聞いた。私は「きちんと」という言葉を安易に使い、その意味を深く考えていなかったため、すぐに答えることが出来なかった。その後、「きちんと」とは、「大きな声ではっきり音読できていること」と答えたが、さらに重ねて、「大きな声で音読できていない人がいたらどうするのか」と問われた。私はそのとき、考えてもみなかったことを質問され、大いに戸惑ってしまった。そして、自分の教案が具体性に欠けており、本当に教壇に立って授業をする自覚がまだ足りていないこ

とに気が付かされた。
この経験から、学習者に活動をさせる際には、目的を明確に決めておくことが重要だということを学んだ。例えば、「音読する」という活動自体にも、「文章を理解するため」、「日本語の発音練習のため」など、さまざまな目的がある。このような目的を事前に明確にしておくことが重要なのだ。この取り組みは、授業中に活動をやっていない学習者がいたときに役に立つ。この活動が日本語学習においてどうして効果的なのかを、学習者にその場で適切に説明することができる。そして、納得してもらったうえで活動をしてもらうことができるのだ。
この指導のあとからは、授業内での活動の目的を強く意識するようになった。そして、目的に合わせて、学習者への目の向け方、指導方法を変えていかなければならないことに気が付いた。
実際の教壇実習では、学習者と対話をし、楽しみながら活動を行うという目標を達成することが出来た。授業の中で、日本と韓国のちがいについて積極的に質問をしたり、クラス内を回りながら学習者自身の経験について質問をしたりと、たくさんの交流が出来た。
反省点は、活動を行うことばかりに集中し、クラス内に目を向けることがあまりできなかったことである。教案でひとつひとつ考えた活動の目標も、授業を行っている際に、細かいところまで意識することが出来なかった。教室内で学習者が目標を達成できているかに目を向けつつ授業を進めていくためには、教壇での練習がもっと必要だと感じた。

3. 複言語・複文化プログラムについて

今回の実習で良かった点は、韓国を以前よりも近くに感じるようになったということである。実習に行く前も、韓国ドラマや韓流アイドル、新大久保の存在など、韓国文化は身近なところにあった。しかし、韓国が日本に対して反日感情を持っていることや政治問題の影響から、韓国に対して心理的に遠いイメージを持っていた。しかし、今回の実習で、私の韓国への心理的な距離は以前よりもずっと近くなった。
心理的距離が近くなった一番の要因は、人との関わりである。韓国語研修のパートナーと、日本語教育実習のチューターとの出会いは、私にとってとても大切なものとなった。これまで、私は外国人の友達と本音を語り合う機会がほとんどなかった。しかし、この実習で出会った友人と、長期間深く関わったことで、心理的距離を感じない友達になることができた。外国人の友人が出来ることは私にとって初めての経験であった。お互い違う国籍であっても、それを気にせずに、楽に話せる関係がとても居心地の良いことを知った。このように友人になることができたのは、大学の授業以外の時間で、食事や遊びの時間をたくさん共有したからだろう。これまで私は、大学内の留学生と授業内でしか関わったことがなかった。しかし、長い時間を共にすれば、国籍の違いがあっても親しくなれることが分かった。
一方で、日韓と東アジアの共生という観点では、このプログラムには限界があると感じた。それは、日本語が通用する守られた空間での韓国人との交流しかできなかったからである。私の韓国語が初級レベルだったのに対し、釜山外国語大学校のスタッフや学生は皆、日本語のレベルが高かった。韓国人が日本語を話してくれるということ自体に、常に相手に合わせてもらっているという申し訳なさを感じた。また、相手の方が日本により興味を持ってくれているのではないかというう しろめたさを感じることがあった。
例えば、９月７日に開かれた日韓学生フォーラムで、日本人と韓国人が両国の関係について本音で語り合う機会があった。フォーラムでの話し合いは、日本語で行われた。フォーラムでは、私が韓国人の学生に伝えることができた情報量よりも、韓国人学生が私に伝えてくれた情報の方が圧倒的に多かった。日本が韓国を占領した責任として、国がどのよ

うなことを行ってきたのか、そのことに対する見解について、韓国の学生は自分の意見をしっかりと持っていた。それに対し、私は明確な意見がないばかりか知識さえもあいまいだった。

また、両国の敏感な問題について、話し合う言語が日本語ということにも違和感を覚えた。韓国人だけが日本語を話すことができ、日本人が韓国語を話すことができないという関係は対等ではない。なぜなら、言語を学ぶことは相手の文化を学ぶことであるからだ。そして、自分が相手の言語を話せないということは、相手の言語という大切な文化を理解できていないことになるからだ。今後日本と韓国の関係改善のために話し合いをするのならば、お互いがお互いの言語を対等に話せるようにするべきである。

しかし、私は、このプログラムに参加したことで、確かに韓国への理解を深め、もっと韓国を知りたいと思うようになった。このことは、日韓共生という大きな目標に一歩近づけた証だといえるだろう。これは、大変意味のあることだと考える。

今後私は、このプログラムで学んだことを活かして、韓国語の勉強を続けていきたい。さらに、慰安婦問題や竹島問題について、日本と韓国がどのような外交をしてきたのかについて学んでいきたい。そして、いつかもう一度、日韓の関係について友人と語り合いたいと願っている。

プログラムから得たもの

1. 韓国のことばと文化を学んで

今回のプログラム参加中、今まで学んだことのある言語の学習と「違う」と感じることが何度もあった。違いとして大きく感じたのは、学習へのモチベーションである。今までの他の言語学習と比べると、モチベーションの高さと内容に違いがあったように思う。

言語学習のモチベーションは、今までで一番高かったように思う。私は、言語を学ぶ際は単語ノートを作成するようにしている。今回も作っていたのだが、前半の３週間のプログラム中に 1000 語以上の単語を追加した。重複するものも多くあるが、短期間にここまで単語を追加したのは今回が初めてであった。このように、モチベーションが高かったため自主学習にも意欲的に取り組むことができた。加えて、生活の中での韓国語を学ぼうとするモチベーションが高かった。パートナーの学生に実際の場面でどのように言うのかを聞き、それを会話場面で使おうとした。例えば、外食に行って、お店に入ったら肉の焼ける香りがただよってくる。そんなときに言いたいのは、「いい匂い～」である。腰を下ろすとすぐ、パートナーの学生にそれは韓国語で何と言うのかを聞く。そしてそれをメモする。次に外食をしたときには、「いい匂い～」を韓国語で言うことができるようになっている。このように、言いたいと思ったことをそう思ったときに聞き、覚えて使えるようにしていた。自主学習へのモチベーションだけであれば高校時代の英語学習の方が勝るかもしれないが、生活の中での言語学習のモチベーションの高さと合わせると、今回が一番だった。

では、このモチベーションの高さを生んだのは一体何だっただろうか。その鍵は、パートナー学生にあると考える。前半のプログラムでは、日本人４人程度のグループに対し韓国人学生が１人ついた。私のグループについた学生は日本語専攻ではなかったが、将来日本で働きたいと思い日本語を学習している学生だった。

まず､パートナー学生のコミュニケーションを取ることへの熱意の大きさが挙げられる。日本語があまり上手ではない学生がパートナーになると聞いていたが、彼女は思っていたよりもずっと日本語が上手だと感じた。時には翻訳機を使いながらではあったが、日本語を使って一生懸命私たちに話しかけてくれた。そのおかげで様々な話をすることができ、韓国の文化についても彼女から多くのことを教わった。その上、彼女は私たちに対しとても親切だった。ある時は、部屋のエアコンの使い方がよく分からないと話した私たちのために、わざわざ部屋まで来てくれた。それは皆で遊びに行った後で、時間は夜だった。彼女は学校の寮で暮らしているわけではないのに､遠回りしてくれたのだった｡このように、日本語で一生懸命コミュニケーションを取り、私たちのことを理解しようとし、親身になって接してくれる彼女の誠意に応えたいと思った。そしてそのためには、韓国のことばと文化を学んで彼女を理解しようとすることと、使う言語は何であれコミュニケーションを積極的に取ろうとすることが必要であった。つまり、彼女の熱意が私の韓国語を勉強するモチベーションを上げることに大きく貢献してくれたのである。

パートナーとの対等な関係性の果たす役割も大きかった。この対等性により、今までで一番外国人に質問をすることができたと感じている。日常会話の中での質問も含めると一番ではないかもしれないが、言語や文化のことを今回ほど質問したことはなかったかもしれない。今春、私はオーストラリアでの英語短期研修に参加し、一か月間のホームステイをした。しかし、私はホストマザーに対しそこまで質問をすることができなかった。言いたいことを分かりやすく伝えるだけの英語力を私が持ち合わせていなかったということもあるだろうが、常に英語を使ってコミュニケーションを取ることによる心理的負担も関係

していると思う。ホストマザーはもちろん私のことを理解しようとしてくれたし、とても親切だったが、外国語を使ってコミュニケーションを取るという点において、私の負担の方が大きかったのではないだろうか。一方で、今回のプログラムでは、日本語を勉強する韓国人である彼女と、韓国語を勉強する日本人である私、という対等な関係が出来上がっていた。しかも彼女は日本語がそれほど堪能ではなく、私は韓国語が全然喋れなかった。この点が、質問のしやすさに大きく貢献してくれたように思う。このように、互いにことばや文化を学ぼうとする対等な関係性があったことが、韓国語学習のモチベーションを高める上で大きかったのではないか。

結論として、今回のプログラムには言語学習のモチベーションが高いという大きな特徴があった。この特徴が生まれたのは、パートナー学生のコミュニケーションを一生懸命取ろうとする姿勢と、互いに言語や文化を学ぶ学習者としての対等性があったためであると考える。

2. 日本語教育実習

後半の日本語教育実習は非常に忙しかったが、学んだことも多かった。この２週間で学んだことについて述べる。

日本語を教えるのは、とても難しかった。まず、Can Do を達成することを目標として授業を行うことのイメージがなかなかつかめなかった。事前学習として「日本語教師のための CEFR」を読んでいたので、CEFR や Can Do がどのようなものか、どんな風に授業を組み立てていくのかは分かっていたつもりだった。しかし実習期間が始まると、それがどんなに傲慢だったかを思い知った。本を読んで理解することと、実際に授業を組み立てることは全くの別物だった。３つのトピックのうちどれにするかを決めただけの状態で後半のプログラムに臨んでしまったことを非常に後悔した。私は「自分と身近な人々」をトピックとして選び、このトピックに沿った内容で読む・書く・聞く・話すの活動を入れようという考え方で教案を作り始めた。しかも、具体的なものをあまり考えずにざっくりとした教案だけ作っていたため､先生からも具体的なアドバイスをいただくことができなかった。しかし、具体的な場面を設定し細かいものを作り始めたら、いくつも新しいアイデアが浮かんできた。このことから、考えすぎるよりもまずやってみることの大切さを学んだ。抽象的なものを抽象的にしか考えていなければ､イメージがつかめないのも当たり前である。昔から、私は考えている時間が長く、動き始めるまでに時間がかかる。たしかに考えを深める慎重さも大切ではあるが、動き始めてから気が付く事もある。これは今後の自分にとって大きな学びであったと感じている。

授業のイメージをつかんでからは、狙い通りのことを学生にしてもらうための導線づくりに苦労した｡例えば､あるテーマを提示してグループで話し合ってもらおうと思っても、話し合いがいっこうに進まない場合がある。この状況を打破するためには、テーマを細分化し話し合いやすくする工夫が必要である。先生からこのことについてアドバイスをいただいたため、導線を作った上で授業を組み立てたつもりだった。しかし実際に授業を行ってみると、自分の導線の甘さを痛感した。指示が分かりにくく何をするのか分かってもらえていなかったり、質問の答えとして想定したものとは違った答えが返ってきたり、想定外のことばかりが起こった。予想していなかったことに臨機応変に対応する力ももちろん重要ではあるが、授業の準備をする段階でもっと気を付けねばならないことはたくさんあったように思う。指示の仕方やことばの選び方ひとつで成果物が変わってくるため、教師の責任の重さを感じた。相手に何かを伝えようとするとき、自分の言いたいことを相手にくんでほしいと思うことは傲慢であると実感した。

自分の計画性のなさについても反省することが多かった。実際に授業で使う配布物や

PPT を優先してつくったのは良かったが、説明の仕方についてはもっと時間をかけて考えるべきであったと思っている。特に２日目の授業は反省すべき点が多い。２日目の授業では、メインとして扱いたかったのは場面３の活動だった。しかし、最後の活動であるグループワークがメインであるような扱いになってしまった。そのため、Can Do の達成度合が下がってしまったと感じている。１コマ目の授業を計画した時間通りに進められなかったということもあるが、どうやって説明し、どのようなことをしてもらえば Can Do が達成できるのかということに対する考えが甘かった。授業準備には時間が無かったが、時間が無いなりに、優先順位を付けて作業に当たることはできたはずである。よりよい成果を生むためにどんな順番で物事に取り組むべきか考えることの重要性を改めて感じた。

3. 複言語・複文化プログラムについて

今回のプログラムの長所についてまずは述べる。第一に、文化理解を促進するプログラムであったということだ。前半の韓国語学習が文化理解につながるのは言うまでも無いが、後半の日本語教育実習も文化理解になっていた。言語に関わらず、何かを教えるためには、教える相手のことを理解しようとする態度が必須である。さらに、教える内容が母語である日本語であったため、自文化や言語に対する理解も深まったように思う。さらに、パートナー学生やチューターが距離の近い友人になったことで、相手を理解したいという気持ちに自然となったと感じている。

第二に、言語観についてもよい影響をもたらしてくれた。今回のプログラムを通じて、ことばとコミュニケーションが切り離せないものであることを再認識した。プログラム中、韓国語が通じないと分かった上で親切に話しかけてくれる韓国人に何人も出会い、そして助けてもらった。彼らと接する中で気がついたのは、「伝えよう」という気持ちが一番大事なのではないかということである。私は英語で話すことに苦手意識がある。すらっと言いたいことが出てこないから苦手なのだと思っていたが、そもそも、それを言い訳にして会話を避けたいと思う気持ちがあったような気がする。文法が間違っていても何でも、伝えようという気持ちさえあれば案外何とかなるものだと感じた。しかし一方で、ことばが「できる」というのは会話ができるということだけではないことにも気づかされた。一週目の授業で学生のレベルチェックをさせていただいた時、たくさん話す人＝日本語の能力が高い人であると思ってしまった。しかし、同じくレベルの判断材料である自己紹介シートを見ると、たくさん話していたのに全然書けていない人も複数いた。また、聞いたことに対してあまり答えてはくれなかったが、リスニング能力が高く、こちらの言うことを正確に理解している人がいることにも授業中気がついた。たくさん話す人は日本語が上手だと思ったのは、私が外国語での会話に対し苦手意識を抱いているせいもあったろう。しかし、言語能力はもちろん会話だけではない。自分の尺度だけで他者を判断することの危険性や自分の常識を疑うことの重要性を感じた機会でもあった。

第三に、フォーラムでの対等性である。１でパートナー学生との関係が対等だったことで質問がしやすかったと述べたが、同じことがフォーラムにもあてはまると感じた。韓国人学生と政治や歴史問題について話す機会はこれまでにもあったが、ここまで領土問題についてつっこんだ質問ができたのは初めてだった。日本語を使うという点ではやはり韓国人学生達にかかる負担の方が大きいかもしれないが、韓国に日本人が来て対面で話すことにより、日本に行ったりテレビ会話を通じて話したりするときよりは負担が軽減され、互いに対等な関係に近づいたのではないだろうか。そしてそれを感じたからこそ、私も質問がしやすかったのだと思う。日本で日本語を使い政治問題についての深い話をすることは、自分がとても攻撃的なことをしているような気になり気が引けてしまう。この点で、お互いにとって今回の環境はよいものであったと思う。

しかしながら、東アジアが共に生きることへつなげるには、いささか不足であったように感じている。たしかに、プログラムを通じて韓国や韓国人のことが好きになった。韓国への理解において、十分に効果はあったと思う。だが、これでは個人レベルの理解に留まってしまうのではないだろうか。フォーラムでの話し合いの中で、自分も相手も政治や歴史についての知識が足りないと思う場面が何度かあった。例えば、私は自衛隊について質問されたが、それに対して満足な答えや意見を言うことができなかった。自衛隊についてそれほど知らず、あまり考えたことがなかったためである。話し合うためには自分も意見を持つ必要があり、意見を持つためには知識がなければならない。事前に政治や歴史についてもっと勉強しておけば、より深い話ができたと感じている。相手の話を聞いてそれをそのまま受け入れるだけでは話し合いとは言わない。自分の持っている見解と照らし合わせて初めて、より深く理解し合えるのではないだろうか。政治問題を気にせずに韓国人と仲良くすることはもちろんできるだろう。だが、両国の間には政治や歴史の問題が依然として横たわっており、それを気にする人がいることもまた事実であると思われる。これが互いの国に抱く感情を悪くする要因になっているのであれば、その部分を理解しようとすることが必要ではないか。そして、この部分を理解し合うことで、より多くの人に考えを広め、東アジアが共に生きる未来へとつなげていけるのではないだろうか。

前半のプログラムが終わった後ソウルへ旅行に行き、板門店ツアーに参加した。その際、日本語ペラペラの韓国人ガイドさんが最後にこんな話をしてくれた。「〇〇だから好き」というのは前提条件が崩れると成立しないが、「〇〇だけど好き」であれば、いかなる欠点を相手が持っていようとも、好きという気持ちが変わることは無い。日本と韓国にもぜひこういう関係になって欲しいのだと。この話を聞いて、「〇〇だけど好き」は家族のような関係性であると感じた。多少口うるさくても、家族が好きという気持ちは揺るがない。この家族のような関係に東アジアがなれたのなら、「共に生きる」という目的を果たしたことになるのではないだろうか。東アジアに帰属意識が芽生えるほど自身のアイデンティティが変化したのかどうかは正直なところよく分からない。だが、韓国が好きだと思うようになったことはたしかである。近いうちにまた韓国に行きたいと思っているし、韓国語も日常会話が問題なくできるくらいにはなりたいと思っている。何より、韓国人ともっと分かり合いたいと思っている。「〇〇だけど」の〇〇には独島に対する考え方の違いや慰安婦関連の対応が入るだろう。これらについての知識はまだまだ足りないが、今後テレビで韓国に批判的なニュースを見たりしても、韓国のことを好きだと言えるような気がしている。そして、そう自信を持って言えるように、もっと韓国のことを理解したいと思うのだ。今回のプログラムを通じて、アイデンティティの変化とまではいかなくても「〇〇だけど好き」と胸を張って言えるようになりたい相手に韓国がなったことは間違いない。

複言語・複文化プログラムを終えて

1. 韓国のことばと文化を学んで

私はこの複言語・複文化プログラムへの参加が決定するまで韓国語を学んだことがなく、韓国語の知識が乏しかったため、基礎から勉強することとなった。韓国語研修で受けた授業は、Can-do を取り入れて場面ごとに単語・文法を学ぶ。先生は韓国語をメインに使用し、授業中は口に出したり、学生同士で行うタスクが多かった。

私がこの授業で良かったと思う点は、韓国語で場面ごとに学習できた点である。場面は自己紹介、お店での注文、時間など頻度の高いものが多く、街に出てすぐに使用することができた。そのため新しい項目を学ぶたびに韓国語を話せる機会が増え、それがとても楽しかった。また、これまでの私の学習方法では頭の中で文法を組み立てながら話すことが多かったため、発音が悪く相手に伝わりづらいものになっていると感じていた。しかし、ボディランゲージを多用し発言する機会も多くあった日本語を介さない授業のおかげで、韓国語をフレーズ・音として覚えることができた。現地の人と話す時に頭の中で日本語を媒介していないと気付いたとき、学んだことがしっかりと身に着いたことを実感できた。また、音で覚えるという点に関して、６週間も釜山で生活をしていたので、自然と駅のアナウンスを覚えた。それをパートナーに言ってみると、私自身は訳を全く知らないのに、パートナーには通じる、ということがあった。言語の根本は「音」なのだなと感じさせる面白い発見であった。

文化に関しては、日本と小さな違いは様々あるものの、あまりストレスは感じなかった。しいて言うなら私は辛いものが得意ではないので、何を食べても基本的に辛い韓国の食事は楽ではなかった。コンビニで売っているカップラーメンがほとんど辛いことが一番驚いた。その他の食事でのマナーや電車の乗り方など日常生活のところどころにある日本と韓国との違いは、自分で発見したものもあれば、パートナーと教え合いながら学んだものもあり、それほど不自由を感じることもなく楽しく生活できた。

このプログラムではたくさんの文化体験が用意されており、韓国の文化を深く知る良い機会となった。同じ授業を受けていた他大学の学生は、K-pop が好き、アイドルが好きな子が多く、それらをあまり知らなかった私は韓国に対する愛が足りていないなと感じていた。しかし、文化体験で韓国文化に触れたことで、これまであまり興味がなかった文化へ新しい興味が沸いた。

また一つ印象に残っていることがある。私は前半の韓国語・韓国文化研修と後半の日本語教育実習の間の期間にソウルへ行ったのだが、ソウルに行く前、「釜山は田舎だから人が温かいけど、ソウルは都会だから日本人という理由で冷たい言葉をかけられるかもしれない」と言われた。しかしいざ行ってみると、単に韓国語が分からなかったという可能性もあるが、接し方や表情からはそんなマイナスな感情は受け取れなかった。むしろ「日本人ですか？」と韓国語、日本語で話しかけられることが度々あり、とても好印象だった。見聞きした印象と実際に経験したことのギャップがとても大きく、この経験から、やはり実際にそこの人と接してみないと分からないことがたくさんあるのだと実感した。

2. 日本語教育実習

後半の日本語実習が始まる前、学生とうまくコミュニケーションを取れるか、本当に授業を出来るのかと不安ばかりだった。しかしいざ準備を始めてみると、指導教員の方が一緒になって悩み、アドバイスをくれ、モチベーションを高めながら作業を進めることがで

きた。

釜山外国語大学校が導入しているCan-doの授業は、始めにゴールを設定して、それに必要な要素を学生が学べるように授業を組み立てていく。そのため、文法、単語が先に来る日本の教育方法とは異なり、必要な文法・語彙を必要な場面で必要な分だけ学ぶCan-doの授業は、どの文法・語彙をどれくらい導入するかなど悩む所が多かった。しかし、前半でCan-doの韓国語研修を受けていたため、自分が学ぶ側だったらどんな場面を設定して欲しいか、どんなことをできるようになりたいかを考えることができ、比較的スムーズに授業を組み立てることが出来た。しかし、準備を念入りにしたからと言って必ずしも授業が成功するとは限らない。例えば、学生の反応はクラスによって違うし、学生の発言をどれだけ拾えるか、間違いをどのようにして指摘するかなど、実践でしかわからないことがたくさんあった。私の担当したA2レベルのクラスは、A2といってもかなり能力的に個人差があったため、その差をどれだけ出さないように授業を進められるかが重要なポイントとなった。授業は大きな失敗もなく、比較的計画通りに進み全体的に上手く行ったように思えた。しかし、発言数に差が出たり、出来ない子が遅れをとるなど、学習者の能力差を感じさせない授業という点に関していえば、成功とはいえないと反省している。このように、実際に学生と対峙した時に、反応を見ながらどれだけうまく授業をコントロールするかも教師の資質として重要だと感じた。

またもう一つ、準備期間に指導してくださった先生と一緒に学生へインタビューをする機会があったのだが、YouTubeを見て日本語を勉強した、という学生が少なからずいた。その子たちは比較的話すのが得意な子が多かった。日本の教育法は良くない、だからなかなか話せるようにならない、という意見を時々耳にするが、韓国では逆に読み書きが苦手な学生が多いようだった。そもそも国がどのような能力を伸ばすことに重点を置いているかが違うため、学生の得意不得意も異なる。話す能力を伸ばしたいのなら、日本の教育方法を非難するばかりではなく、現在はYouTubeなどインターネットで利用できるツールがたくさんあるのだから、そういったものを積極的に使って行けば良いのだなと思った。

以上の様に、日本語教育実習では教科書を読んだだけではわからない、現場で発生する問題やその対処法などを学ぶことができ、日本語教師がどういうものなのかを身をもって経験することができた。それと共に、日常生活やこれからの自分の物事に対する姿勢など、日本語教育に限らない部分も学ぶことができた。私は実習の最後の方に指導してくださった先生から、「内省がきちっと出来るのがとても良いところだ」と言っていただいた。とても嬉しく自信になったとともに、これまで自分ではわからなかった長所が発見できたのも大きな成果だった。このことを大切にして今後も様々なことに挑戦していきたい。

3. 複言語・複文化プログラムについて

この複言語・複文化プログラムの良かった点は、言語を学ぶ立場と教える立場を同時に経験できる点である。ことばを教える、というとどうしても自分が優位に立っているような、相手を下に見るような側面が少なからずあると思う。しかし、前半で韓国語を学んでいたことで、相手の立場を理解し、学び合い、尊重し合う姿勢を持って接することができた。

またその他の良かった点は、日韓学生フォーラムに参加できた点である。私自身、以前は政治問題に疎く、そこまで熱く語れるほどの知識と考えを持ち合わせていなかった。ニュースなどでよく報道は目にするが、まるで余所で起こっていることにように感じてしまう部分があったように思う。しかしこのフォーラムに参加したことで政治問題への関心も高まり、他人事ではなく自分自身の問題として考えられるようになった。理由としては第

一に、フォーラムに参加するのなら何も知らない状態では相手に失礼だろう、とある程度の概要を調べたりして知識を増やそうしたからである。第二にフォーラムでディスカッションをした韓国の学生の熱量が想った以上に大きく、直接ディスカッションをしたことで、物事を深く考え自分の意見を持つことの重要性を認識できたからである。その他、印象に残っていることとして、韓国の軍隊について詳しく話を聞くことが出来たことが挙げられる。私の地元には米軍基地があり、元々軍隊などに少し興味を持っていた。私がディスカッションを共にした学生の中に、軍隊を経験した学生がおり、軍隊の訓練がどれだけ厳しいか、軍隊には二度と行きたくないと思っている人が大半だ、など生の声を聞くことができた。反対に、私の身近にある米軍基地、自衛隊をどう思っているかなどを韓国の学生に話したりして、双方が理解し合おうとしている空気がとても心地よく感じた。このように日本にいては知ることのできない韓国の実情や、韓国の学生が日本についてどう思っているのか、またメディアではどのような報道がされ、学校ではどのような教育を受けているのかを具体的に聞く事ができたと同時に、互いを理解して尊重し合う重要性も実感でき、日韓学生フォーラムはとても有意義な時間となった。

反対に良くなかった点としては、日本人学生と接する韓国人のほとんどが日本が好き、という点である。前半の韓国語・韓国文化研修でも、後半の日本語教育実習でも、私たちと関わりのあった学生は日本語を進んで学習している学生であるし、日本語を専攻もしくは副専攻で学んでいる学生ばかりだった。日韓学生フォーラムの中で、韓国の中には若い世代であっても反日感情を持つ人もいる、という話を聞いた。そういった人の意見を聞く事こそが日韓の関係を良くするためには重要であり、もっと反日感情を持つ学生との対話が必要だった。今回参加した私たち日本人学生は全員韓国語が話せないため、日本語が話せる学生としか対話ができなかった。そう考えると、地球人としての意識を高め、グルーバルな視点での友好を築くには、言語能力がかなり重要な要素であると感じた。

もう一つは、パートナーと過ごす時間が短かった点である。これは去年のプログラム参加者も言っていたようだが、今年も同じように実習生は日本語教育実習の準備に追われ、特に後半のパートナーとうまく時間を作ることができなかった。またそれに付随して、後半のパートナーと政治的な問題を話すタイミングもあまりなかった。事前授業の段階で、後半のパートナーには政治的な話もしてもらうよう頼んでおいたという話があったが、そもそも時間があまりなかったということと、言語的な問題でそこまで深い話ができそうになかったという点から、日韓学生フォーラム以外の時間で密な話ができなかったのが残念だった。他大学の学生も含め、日本語教育実習に参加している学生がより良い授業を作りたいと時間を目一杯使って準備をするのは当然のことである。そこで改善策として、学校側が企画までする必要はないけれども、この時間はパートナーと交流しよう、という時間を指定するのが良いのではないかと思う。実習中は実習生の忙しさに、パートナーが声をかけづらくなっているのを感じた。そこで、時間を指定することで、実習生がこの時間くらいはパートナーとの楽しい時間を満喫しよう、と切り替える機会を作ると良いのではないかと思う。

この複言語・複文化プログラムに参加するにあたって、私には生の韓国を知り、それをまわりの人に広めて少しでも嫌韓感情をなくしたい、という目標があった。今回６週間という長い期間韓国に滞在したことで、メディアを通してはわからない韓国の文化や現地の人々の様子、考え方などを深く知ることが出来たように思う。今までは説得力のなかった主張も、これからはこの経験を踏まえ、自信を持って韓国について話せるようになると確信している。もちろん政治的な面などわだかまりは消えないが、嫌韓感情をもつ人々に少しでも良さを伝えていきたい。

最後に、この複言語・複文化プログラムを通じて日韓・東アジアの共生のため若者とし

て何ができるか、ということを考えてみた。結論としては、できるだけ多くの人に興味を持ってもらうことが大切なのではないかと思う。例えば、そもそも日本、韓国に興味・関心がない人はこのようなプログラムには参加しないし、ましてや日韓学生フォーラムのようなお互いの意見を生で聞ける機会を利用することもない。実際の経験に勝るものはないが、その経験をするには自らの決断で飛び込む必要がある。またいくら他人が呼びかけたところで、少しでも興味がなければ振り向きもしない。興味・関心が不可欠である。近年ではインターネットが大きな影響を及ぼし、言語・文化が一瞬で行き来する。そこでそういった身近なものを利用して周囲の人々の関心を世界へ広げていくのが、日韓・東アジアの共生のため、私たちでも出来る初めの一歩なのではないかと思う。

韓国での実習を終えて

1. 韓国のことばと文化を学んで

釜山外国語大学校で韓国語の授業を受け、多岐にわたるプログラムで韓国の文化を学ぶ中で、日本と韓国の共通点と相違点を強く意識した。

まず、韓国語の構造と語彙、発音に日本語との類似性を感じた。両言語ともSOV形で一つの文を構成し、概ね同じような「てにをは」が存在する。語彙においては、寄宿舎や寮を意味する「기숙사」など、発音から漢字を連想させ、意味を類推できるものが多く見られた。個人的な印象ではあるが、漢語の発音において、韓国語は中国語により近く、日本語と中国語の中間地点という感じがした。

発音総体としては、韓国語は「なんとなく分かる気がする」という感覚があり、語弊を恐れずに言えば、地方に住む年配の方の、訛りの強い方言を聞く感覚に類似していた。また、韓国語のクラスでは九州出身の学生が多かったが、彼らのアクセントが、韓国語のそれに、標準語よりも近かったのが印象的だった。これらの点を踏まえても、韓国語をもう少し勉強しておけば１ヶ月超の釜山滞在をさらに有意義なものにできたのではないか、と後悔が残る。

次に、食と上下関係、学歴の評価において日本文化との相違点があった。韓国料理はキムチやコチュジャンなどの辛いものや、サムゲタンやチゲなどの鍋を使ったスープなどとにかく体を温める食べ物が多く、また漬物などの保存食が豊富であることから、冬季における気候の厳しさを窺わせた。テーブルマナーにおいても、日本では器を持って食べるのに対し、韓国では器を持たずに食べるなどの違いが見られた。

また、上下関係においては、ほとんどの場面において年上を上位とすることが徹底されていた。言語において年上、年下で呼称が明確に区別され、敬語が発達しているほか、韓国人学生の話を聞いていても、最も身近な年長者としての親の意思を絶対視している節があった。ただし、若い世代においては、カップラーメンを持って食べるのはセーフなど様々な例外が生まれつつあるようだった。

学歴に関しては、現在の日本より遥かに、社会的地位と直結しているという印象を受けた。韓国の受験戦争の厳しさは日本にも知られているが、韓国人学生の多くが実際に高校時代を勉強だけに捧げており、またそれが当たり前であるという風潮が見られた。一部の学生は、英語の代わりに日本語を選択して受験したり、韓国での就職に見切りをつけて日本企業で就活したりと、王道の学歴社会からの抜け道として日本に興味を持っているようだった。

2. 日本語教育実習

日本語教育実習では自己紹介をテーマに授業をした。その中で、一定の前提や文脈が存在しない場において、自分の立場を自分の中で位置づけ、それを外に対し説明していくことの難しさを感じた。日本では「私はお茶の水女子大学の学生です」と言うだけで済んでしまう。

一方、釜山では、私は変わらずお茶の水女子大学の学生であるが、日本人であり、日本語教育に興味があり、教育実習生であり、先生である、という立場を明確に表明していく必要があった。そうした立場を表明しなければ、得体のしれない何かとして、他人からの信用は得られないことに授業をしていく中で気づいた。

これは外国に住む外国人との交流に限った話ではないと思うが、日本人相手ではすでに

様々な前提が共有されており、あとは会話する中で人となりを察する、という一種の甘えが可能であるため、こうした経験は新鮮だった。

また、自分の立場をどのように表明するか、という点も深く考えさせられた。具体的には、どのようにすれば私が先生であることを学生が腑に落ちるか、ということである。実際に授業をする前は、教壇に立って日本語の語彙や文法を説明すれば先生であると思っていた。また、授業の内容が面白く、わかりやすければいいと思っていた。しかし、１回目の授業での学生の微妙な反応を見て、それだけでは授業としては不十分であり、ただの100 分間のプレゼンテーションになっていたことに気付いた。つまり、私は先生になりきれていなかったことに気付いた。学生にとっての先生とは、個々の学生が分からないことを教えてくれる存在であり、学生の立場にも立てる存在ではないか、と思い直し、２回目の授業にはこの反省を生かして臨んだ。１回目の授業の学生の反応を受けて復習をしたり、一人一人のプリントの解答状況を確認して回ったりと、私としては概ね満足のいく結果となった。

今回の教育実習で、お茶大生や名古屋外大、京都外大の学生も含め、多くの学生が真剣に学習している様を間近に見ることができて大変刺激になった。準備段階に集中することで余裕のあるスケジューリングをしたり、毎日同じ時間に同じカフェで作業したり、友人同士で会話することで緊張感を適度に調節したりと、人によって物事への取り組み方が異なっていた。人の優秀さには様々な形があり、特にお茶大生は普段の大学の授業では見られない一面を見ることができて印象的だった。

3. 複言語・複文化プログラムについて

まず、本プログラムの長所は、異国としての韓国で少数派の日本人として生活する中で、より謙虚に切実にその言語と文化を吸収できることと、またそれを通して新たなアイデンティティを感じる体験ができることである。

もちろん、日本においても韓国語の学習や韓国の文化に親しむことは十分可能である。しかし、日本では日本語が通じるため、それらの習得が生活していくために差し迫って必要な事態は発生しない。生活していく上で身につけなければならない言語や文化として、駅の案内掲示板や飲食店のメニューの読み方、その他店員の受け答えなどが例として挙げられる。これらは韓国人に囲まれた、韓国語以外の言語が通用しない場面において、ある意味で萎縮し、緊張感を持つことによって、より自然な形で習得することができるのではないかと推察する。

ここでいう、より自然な形での韓国語および文化の習得は、文型や言い回しなどの暗記より、新たなアイデンティティの形成に近いのではないかと考える。なぜなら、韓国語および文化の習得は、多くの場合韓国人とのコミュニケーションの円滑化を目標とするが、それは知識によってではなく、感覚によって可能になると推察するからである。

私は前半と後半の研修の間、たまたまではあるが日本で過ごした１週間で、帰国したという実感を持つことができなかった。釜山大の街より、渋谷や新宿に強い異国感を感じるようになっていた。これは、前半の研修の３週間で自分なりに韓国に適応した結果、対韓国アイデンティティが形成されたからではないかと考えている。対韓国アイデンティティとは、自分を日本人というより、韓国で生活する者として位置づけ、言語や文化的な風習を韓国に合わせたものである。もともと私に存在していたアイデンティティは、その新しいアイデンティティと共存はするが、その分だけ小さくなるため、一時帰国の際に母国である日本に対して違和感を抱いたのではないだろうか。

推察の域を出ないが、外国語の習得や文化への適応は、アイデンティティに結びついた感覚的なものであり、実際に現地で生活してみなければ理解し得ないため、今回のプログ

ラムは貴重な機会となった。
続いて、本プログラムの限界は、釜山外国語大学校の学生の日本への前向きな理解や日本語でのコミュニケーション能力に依存していることであると考える。一般的に、日韓関係は歴史的に良好とは言えず、互いに反発しあっていると言われる。しかし、今回の実習では反日感情を目の当たりにすることはなかった。これは日本との貿易の窓口の一つとなってきた釜山という街の、外国語大学の日本語学部という特殊性が可能にしたことであり、当たり前のことではないと受け止めている。また、チューターの学生や授業を受け持った学生の日本語と、日本人学生の韓国語運用能力に大きなギャップがあった。
しかし、反日感情の強い韓国人を対象にすると日本語を教えることはおろかコミュニケーションをすることも難しく、また大学で韓国語を専攻し、韓国語に堪能な日本人学生が、必ずしも日本語を教えられるとは限らない。
そこで、日本の大学で韓国人学生が日本人学生を対象に韓国語を教えるプログラムの実施を提案したい。教育実習という形にするのが望ましいが、参加する韓国人学生の幅を広げるため、言語に関しては簡単な韓国語教室を開催することにし、文化に関しては日本人学生と日本文化を体験する、というものにする。これは、私のチューターを担当した学生が実際にやってみたいと言っていたもので、実現すればより日韓の相互理解が深まるのではないかと推察する。

複言語・複文化プログラムを終えて

1. 韓国のことばと文化を学んで

私が韓国語の勉強を始めたのは今年の４月からだった。やっとハングルが読めるようになったくらいのレベルだったため、この研修に参加する上で、言葉の問題は不安が大きかった。しかし、実際に行ってみると、研修の始めにレベルテストがあり、自分のレベルにあった韓国語の授業を受けられるようになっていたため安心した。授業では、日本語を話せる先生もいらっしゃれば、話せない先生もいらっしゃって、先生によって教える際の言語は異なっていた。日本語が話せない先生の授業の時には、話の流れや先生の表情、ジェスチャーから意味を推測することが多かった。時には携帯の辞書機能を使って言葉の意味を教えてくださることもあった。日本語を話せる先生でも、最初は日本語を使って説明をする割合が大きかったが、次第に韓国語で説明をすることの方が多くなっていったように感じられた。私は今まで外国語を習った時に、特に基礎的なことは間接法でしか習ったことがなく、直接法で習うのは初めてだった。直接法では、なんとなく大まかなことは理解することができても、細かいことまで理解するのは難しく、同じクラスの中でもわかっている学生もいれば、そうではない学生もいて、個人個人によってどれくらい理解できるのかに差が出てしまうというのは、外国語を直接法で学ぶ際のデメリットともいえるのではないかと思った。授業では、自己紹介やお店での注文の仕方など、実際に韓国で生活する上で必要な表現を主に学び、習った表現を街で買い物をするときや韓国の方と会話をする時にすぐに使うことができてよかった。はじめは、街中や地下鉄の中で耳にする韓国語がただの雑音でしかなかったのだが、研修を受けていくにつれて、聞き取れたり理解できたりするものが増えていき、ほんの少しではあるが韓国に着いた時よりも自分の韓国語能力が成長したことを感じることもできた。これは現地で学び、現地で生活していたからこそ感じられたものだったのではないだろうか。

韓国語の授業以外にも文化体験や釜山市内の観光、韓国人学生のパートナーとの交流も多くあった。観光やパートナーとの交流では、ガイドブックには載っていないような、現地の人だからこそ知っているようなところへもいくことができてとても楽しかった。しかし、釜山外大の研修担当の先生も、グループのパートナーも日本語がペラペラで、ほとんど日本語を使って会話をしてしまったのは反省すべきだと考える。私たち日本人学生の韓国語能力がそもそも乏しかったということもあったが、もう少し韓国語でコミュニケーションをはかろうという意識を持つべきだったと感じている。

韓国に行くのは今回が初めてで、研修に参加するまではテレビで見た韓国というものしか知らず、その中には日本に対してあまり良くない感情を抱いている人もいるとうネガティブなイメージも含まれていた。しかし、この研修中にそのような人に出会うことはなく、日本人であるということを伝えると若い人から年配の方まで、知っている日本語を使って話そうとしてくださったり、日本に行ったことがあるという話を聞かせてくださったりと、とても温かく接してもらうことが多かった。韓国に行く前までは、あまりこのようなことを想像していなかったため、とても嬉しかったし、むしろ日本人の方が、外国から来た方々に対する態度が冷たいのではないかとさえ感じることもあった。

日本と韓国はとても近い場所にあるにもかかわらず、人との接し方や食事のマナー、街の雰囲気など様々な部分で違いが見受けられた。この韓国語研修を通して、良い意味で日本の良い部分・良くない部分、韓国の良い部分・良くない部分に気づくことができたのではないかと考える。

2. 日本語教育実習

日本語教育実習は、６週間の複言語・複文化プログラムの中で、一番不安に感じていたものだった。なぜなら、これまでに誰かに何かを教えるという経験をしたことがなかったことに加え、日本語教育を副専攻にしているわけではなく、日本語教育についての知識もほとんどなかったからである。

最初の１週目は、釜山外大の先生方の授業を見学した。担当の先生だけでなく、他の先生の他のレベルの授業を見学し、先生やクラスのレベルによって授業の進め方や雰囲気、話すスピード、日本語と韓国語を用いる割合が全く異なるのだということに気づかされた。今まで、授業は生徒や学生目線でしか見たことがなかったため、自分が授業をする身であるということを意識しながら授業を聞くことは、先ほど述べたような普段は気にもしないようなことにも気づくことができてとても新鮮で興味深かった。しかし、授業見学の期間はオリエンテーションが主であったことや教案作りに追われてしまったことで時間の余裕がなくなっていき、実際の授業を見学する機会が少なくなってしまったのは少し残念だった。

授業見学をする一方で教案作りも同時に進めていた。私は韓国語研修が終わったあとすぐに、指導担当の先生と面談をして、大まかな授業の流れは日本語教育実習が始まる前にはなんとなく考えていた。しかし、実際に自分が担当するクラスの授業や先生方が授業をされる様子を見学する中で、なぜ、なんのためにこの活動を行う必要があるのかということを考えた上で教案作りをできていなかったことに気づき、何度も考え直して修正し、先生と面談をしてまた修正をするというのを繰り返した。なかなか良いアイディアが浮かばずに、夜遅くまで作業をすることもあったが、教案が完成した時には達成感も感じられた。事前学習で can-do のことはわかったというような気がしていたが、それはただわかったつもりになっていただけだったのだと、実際に教案作りをする中で強く感じた。また、教案を作る時には自分がその授業を受ける学生だったらどう感じるのかということを考えながら作るというのが大切であることを学んだ。

２週目からは教壇実習が始まった。私は指導担当の先生が同じ、他の実習生の教壇実習を見学した後に自分の実習を行った。他の実習生の授業を見学していた時には、実習生の様子や授業を聞いている学生の様子がよく見えていたのに、自分が実習を行う立場になると、授業を進めることで頭がいっぱいになり、周りが見えなくなってしまうことに気づいた。１日目の教壇実習が終わったあと、ホッとしたのも束の間で、指導担当の先生や森山先生からたくさんのフィードバックをいただいた。その中でも、声の大きさを上げることや声に表情をつけることが２回目の実習の一番の課題になった。その時に、指導担当の先生から言われた、学生の授業に対する態度は、先生の声の大きさや表情、雰囲気などに大きく影響されるという言葉が心に残った。２回目の授業は、１回目の時よりも準備時間に余裕がなく、直前まで授業の流れを確認することに追われ、不安や緊張も大きかった。しかし、１回目よりも授業の雰囲気が良くなっているように授業をしながらでも感じられ、落ち着いて授業を行うことができたのは良かった。学生に助けられることも多くあり、授業は先生だけで行うものではないのかもしれないとも感じた。しかし、良かったことばかりではなく、1回目の授業後に、先生と話した声の大きさや表情はうまく改善することができなかった。実習中はやはり、授業を進めることに集中しがちになってしまったことが原因だった。たった２回の実習で、全てを改善することは難しいと言われたが、これは日本語教育だけでなく、普段の生活にも通じることだと言えるため、今後の生活でも心がける必要があると感じた。

２週間の実習は初めてのことばかりで大変なことも多く、辛いと感じることもあったが、指導担当の先生が熱心に指導してくださったことや他の実習生が作業をしている姿を

見て刺激を受けたこと、韓国人のチューターが励ましてくれたことなど、多くの支えがあってやり遂げることができた。２週間、授業と真剣に向き合っただけでなく、自分自身の性格などへの課題も見つけられた。実習が終わった後には、達成感を強く感じられ、とても貴重で有意義な経験をすることができた。

3. 複言語・複文化プログラムについて

６週間の複言語・複文化プログラムを通して、自分の目で実際の韓国や韓国文化に触れることができ、韓国文化に対する理解が深まったと感じる。このプログラムに参加するまで、私は韓国に行ったこともなければ、韓国人の知り合いがいたわけでもなかったため、韓国に関する情報というのは全てテレビや新聞などのメディアから得るものに基づいていた。実際に韓国で生活をし、韓国の学生と色々な話をしたり、どこかに出かけたりする中で、日本にいてメディアからだけでは得られない韓国の文化や韓国の人の考え方などを知ることができた。さらに、今回は中国からの大学院生も一緒に参加し、３カ国の学生同士でお互いの国について話す機会も多く、中国のことについても様々なことを知ることができた。同じ東アジアの国といえども、似ているところもあれば、異なる部分もあり、自分の中で東アジアに対する視点を日本中心だったものから、少し広げることができたと感じる。異なる文化に触れた時、日本ではなぜこうなのかということを一緒に考えるようになり、日本のことを客観的に見つめ直すことのできる良い機会になった。同じ日本、同じ東アジアでも様々な文化や価値観があることに気づき、自分の中にある文化を振り返ることのできる時間となり、今回のプログラムで複文化というのは以前よりも養えたのではないかと考える。しかし、複言語という点では少し限界を感じてしまった。もちろん、街中で習った韓国語を使ったり、聞き取ったりする機会は、プログラムが進むうちに増えて行ったのだが、やはり、日本語を話すことの方が多かった。日韓学生フォーラムでも日本語で話をすることが当たり前のようになっていた。それには、日本人学生の韓国の学生とは韓国語で話そうとする意識欠如や韓国語能力が十分でなかったことにも原因があるかもしれない。言語の面では、日本人学生と韓国人学生が対等な立場に立つのが難しいと考えた。

日韓学生フォーラムは、普段話すことのできない日本と韓国の間の問題や韓国に対する疑問を率直に聞くことのできるいい機会だった。しかし、日本人学生も韓国人学生も嫌韓・反日感情があまりない学生同士の議論となってしまったことに少し物足りなさを感じた。韓国の学生は、特に若い人は日本に対してあまりネガティブな気持ちを持っていないと言っていた。しかし、どちらの国にも嫌韓・反日感情を持つ人々はいるはずである。私は今回のプログラムでそのような人々に出会うことはなかった。日本について悪く言われた時に、うまく受け答えができる自信がなかったため、どこか安心していた部分があったのだが、日韓の問題について考えるとき、お互いのことを好意的に受け止める人同士で話していても、問題を根本的に解決することはできず、不十分なのではないかと感じるようになった。

このプログラムに参加する前後で、私の中で大きく変わったことが１つある。それは、プログラムに参加する前よりも日本と韓国との距離が心理的に近くなったということだ。以前は、私の中で韓国というと、日本の隣の国と言ってもどこか遠い存在のように感じていた。しかし、６週間韓国で生活をし、様々な人に出会ったことで、とても近い存在のように感じられるようになった。日韓・東アジアの共生のために若者として何ができるかと問われると大きな問題のように感じられる。今考えられることとしては、プログラムによって得られた自分の中の変化や韓国の方々との繋がりを今後も維持していくこと､そして、自分が目にしたり耳にしたりした経験を日本にいる周りの人に伝えていくことではないだろうか。日本語と韓国語の言語の対等性を気づくのが困難であったこと、日本に対して好

意的な韓国人学生としか交流ができなかったことなどの限界もあったが、自分や日本を見つめ直し、新たな文化や価値観に出会うことができ、私にとってとても意味のある時間を過ごすことができてよかった。

今回のプログラムに参加する上でご指導いただいた森山先生や釜山外国語大学校の先生方に改めて感謝申し上げます。

韓国の研修について

1. 韓国のことばと文化を学んで

釜山の韓国語短期研修で、韓国語を学び、様々な体験をした私は、韓国の国民性や韓国文化への理解を深めることができました。

研修の８月７日から 23 日のほとんど毎日４時間の韓国語授業を受けました。私はこのプログラムに参加するまでは、韓国語についての知識は全くなく、３週間の韓国語学習の授業はハングルから学ぶことになりました。韓国語の習得は大変だと思いましたが、中国語と日本語ができる私は、韓国語と中国語と日本語の共通点を見つけ理解し覚えることができました。初めてハングルを覚えることは大変ですが、韓国語の習得はこの手法によりだんだん容易になっていったように感じました。具体的な授業の内容としては、ハングルと簡単な日常生活の単語の読み方や綺麗な発音の仕方を学び、その後、場面の会話を学びつつ（例えば、自己紹介、お店での注文の仕方、趣味)、その場面に出てくる文法も学びました。

授業の言語としては、韓国語だけで意思疎通を行なっていました。初心者向けのクラスで、語彙や文法を説明するために、先生たちは豊かな表情やボディーランゲージを多用していました。大変理解しやすく印象に残る授業でした。しかし、少し難しい単語や文法を学ぶときは、表情やボディーランゲージを使ってもわからない状況になり、学生たちが困惑している姿を見受けました。また、自分が言いたい韓国語を先生に聞くときも、意思疎通ができませんでした。推測するに、目標言語だけでの授業の進め方も語学習得の一つではありますが、もし先生が日本語もできれば、もっと効率的に授業を進めることができると思います。授業の形としては、アクティビティが多く、韓国語を話す機会がたくさんありました。積極的に参加することにより、まさに「状況的な学習」になっていたように思います。例えば、お店で品物を注文する場面の韓国語授業では、前半は教室で必要な語彙や文法を学び、後半は釜山外国語大学校のカフェやコンビニに行き、前半の授業で学んだことを使い実体験しました。実際の行動で言葉を覚えて行くことができたのがとてもよかったと思います。

このような３週間の韓国語授業を通して、ハングルを読めるようになったり、簡単な会話もわかるようになったりしました。最初は街の中で人が話す言葉、流れている K-POP、放送などの言葉は雑音に聞こえ、非常に寂しく、異郷人の感じが強かったです。しかし、私の場合は３週間で韓国語に対する感じ方に急激な進歩がありました。人が話す言葉は疎くなくなり、人との簡単な会話もでき、とても達成感に包まれました。韓国・韓国人に対する感じ方も随分と変わりました。言葉の重要性を実体験で学び直せました。

今回の研修は韓国語を学ぶだけではなく、釜山外国語大学校の生徒のパートナーとともに行動しました。韓国人のパートナー１人に対し、３～５人で様々な観光名所を回ったり、食事をしたり、韓国の文化も同時にパートナーから学びました。例えば、韓国を訪ねる前に韓国の上下関係の厳しさについては韓国人の友達から聞いていました。しかし、実際は想像よりはっきりしている上下関係だと気づきました。私は大学院生だから、年齢も学歴も一番高いです。他の参加者と韓国人のパートナーと一緒にグループ活動した時、パートナーはいつも「先輩、何が食べたいですか？決めてください」「先輩、お先にどうぞ」「先輩…」と私に言いました。「グループ活動なので、メンバー全員の意見を聞いた後に決めた方がいいと思います」とパートナーに伝えましたが、「だめですよ、韓国では必ず先輩に聞きます」と言いました。韓国では、先輩は王様のような存在だと言っても過言

ではないと思いました。
　三週間で、パートナーと離れたくないと思う程に、絆を深めることができました。韓国の生活や文化、また韓国の人に実際に接触することで、隣国に対する理解も深めることができ、韓国人の友達もできました。とても良い経験になりました。

2. 日本語教育実習

　今回の日本語教育実習は９月２日から 14 日まで、二週間しかありませんでしたが、とても充実した二週間でした。
　私は日本語教育コースの大学院生ですが、日本語教育の専門知識を勉強する時間はまだ少なく、実際に学生に日本語を教える経験も全くありません。私が担当するクラスは B2 クラスなので、対象者はレベルが非常に高い学生です。且つ、外国人である私にとって、日本語は母語ではありません。もし学生さんの日本語レベルが私より高ければどうしようかと、実習が始まる前までずっと心配していました。しかし、初めて指導していただく先生と打ち合わせをしたときに「自分が外国人であることをあまり気にしない方がいいです。自分も学生たちと同じような外国語学習者の立場に立ち、自分が日本語を勉強して得た経験を活用すればいいと思いますよ」とのアドバイスを受けました。非母語日本語教師はまず心理的な負担を背負わず、自分の長所を発揮することができるように頑張ることが大事だと感じました。
　教育実習において、最も困難だと感じたことは Can-do の概念に沿って、全てを日本語で行う教案を作ることです。Can-do の概念は知っていますが、自身経験したことのない外国語学習法だったので、Can-do の場面を設定することには大変工夫を必要としました。また、授業は全てを日本語で行うので、語彙レベルのコントロールが必要です。新出単語を日本語でどのように教えるかが難しいのはもちろん、学習者の実際の語彙レベルを掌握して適切な新出単語を選ぶことはさらに難しく且つ重要だと思いました。私が選んだトピックは「住まいと住環境」で、B2 レベルの学生は「建築」「構造設計」などの単語は知っているはずだと思っていましたが、実際は読めない学生が多かったです。反省会で、指導先生が「中国人の学習者にとって漢字は簡単ですが、韓国人にとってはとても難しいです。あなたは自分では気が付かなかったのですが、このような語彙を新出単語として平仮名をつけて、説明する必要があります」との指摘を受けました。多様な学習者に適切な教え方を分析する必要性を感じました。
　また、今回の教壇実習を通して、教師としての人間力の重要性にも気づきました。文部科学省が提唱している優れた教師がもつべき総合的な人間力のことを思い出しました。教師の態度・話し方・性格は授業に大きく関わると思います。まずは、教育的な熱情・真剣さは優れた教師の第一条件といえ、教職に対する使命感のあらわれです。それが面倒見の良さや、厳しくも温かい対応、細かい指導という形で生徒に伝わっていくように思います。私は、いつもこれを大事にし、100 パーセントの熱意を持って授業をしました。授業の最後、アンケートに学生から「先生が頑張ってくれて、とてもよかったと思います。」などのコメントをもらい、自分の努力が認められたと感じ、これからも一生懸命に頑張りたいと思いました。
　また、テクニックだけで良い授業ができるかといえばそうではなく、学生の心をつかむ話し方もとても重要です。話す速さ、音量、抑揚、話の途中にポーズを入れることなどの技術より、学生の興味を引き出すことで、面白く楽しんで授業をすることができると思います。指導していただいた先生から一回目の授業では「声が小さい」「抑揚がない」とのフィードバックをもらいました。二回目ではマイクを使い、女優さんのように抑揚をつけて授業を行うことで確かに前回より学生たちの反応が良くなりました。

さらに、教師の性格も大切です。私の性格は楽観的、積極的な性格ではありますが、失敗をおそれる人間です。おそれすぎて授業の途中に学生から質問された時には何回も自信をなくし、回答の声も小さくなり、教室の雰囲気が急に沈黙した場合がありました。反省会では「先生の雰囲気は教室の雰囲気です」と指導先生に言われました。より優秀な日本語教師になるためには、この点は改善すべき課題だと考えます。

3. 複言語・複文化プログラムについて

本プログラムの前半の三週間で、パートナーと離れたくないと思うほどに、絆を深める事ができました。正直、三週間で韓国人のパートナーと仲良くなれないだろうと思っていました。実は、終末高高度防衛ミサイル（ＴＨＡＡＤ）体系配備による中国の経済報復など、いわゆる「ＴＨＡＡＤ事態」以降、中国ネット上の韓国関連記事には悪質な書き込みが後を絶ちませんでした。つまり、韓国人に対する中国人の全般的なイメージは大きく悪化しています。留学する前、私も韓国人に対するイメージは良いとは言えませんでした。今回の韓国語研修を通して、韓国人に対して肯定的な認識を持つことができるようになりました。また、パートナーにも今回のプログラムで、中国人に対するステレオタイプも変わってきたと言ってもらえました。問題の多い国際関係の状況の下であっても、個人レベルでの交流では中国人、日本人、韓国人という国籍には関係がないことを再認識しました。実際の韓国・韓国人を少しでも知ることができたこと、そしてステレオタイプが変わったことはよかったと思うと同時に、このような交流機会が多くなれば、東アジアの国民の相互理解がきっと進むことができると感じました。特に、日本と韓国両国の交流だけではなく、中日韓の交流機会も多くればもっと良いと思います。例えば、お茶の水女子大学の場合は、お茶大・釜山外大・大連外大３学校の交流項目があれば、参加する学生はきっと複言語・複文化に対する理解を深められると思われます。

９月 17 日には日韓学生フォーラムに参加しました。私のグループは中日韓の教科書とお互いのイメージについて話しました。軍隊や歴史事件に関する事だけではなく、お互いの悪いイメージについても討論しました。とても珍しく貴重な経験ができました。そして悪いイメージがマスメディアのせいかあるいは誤解かもしれないと考え、具体的に説明して討論が行われました。相方で隣国の本当の様子を真剣に考え直すことができ、非常によかったと思いました。残念なのは、授業時間のため、このフォーラムに参加した学生の人数が少し少なかった事です。人が多ければ多いほど、多くの話題が出ることが予想され、より討論内容が充実したフォーラムになれると思います。

4. 結び

本プログラムに参加するにあたりご指導いただいた森山先生、松浦先生にこの場をお借りし、感謝申し上げたいと思います。また、ご支援をいただいた釜山外国語大学、お茶の水女子大学にも感謝申し上げます。

今回の貴重な経験を私の今後の学習・研究に生かしていきたいと思います。

【学生が作成した教案　日本語 A2　Ａさん】

１コマ目

日時	2018 年 9 月 10 日（月）		15:00 ～ 16:50	
氏名	A		指導教員	
対象者	A2 レベルの大学生		授業時	100 分
授業の目標（課題）	トピック：自分と身近な人々 レベル：A2 〈理解〉　自己紹介やその人の身近な人の話を聞いて、基本的な情報(職業や外見、どこに住んでいるか、趣味など)であれば、理解することができる。 〈やりとり〉自分や身近な人々の職業や外見、また、どこに住んでいるかということについて、相手の協力を得ながら、やりとりができる。 〈表現〉　自分を身近な人々について、短い語句や文を並べて表現できる。			
指導項目	語彙：　専攻、職業、仕事、会社員、主婦、留学生、教師、音楽、得意[な]、苦手[な]、料理する、運動する、働く、学ぶ、住む、専攻[する]、聞く、面白い、楽しい 文法：　～ています、[辞書形]のが[形容詞]です 表現：　初めまして、どうぞよろしくお願いします			
時間	活動ごとの目標（課題）	活動	活動ごとの評価ポイント	教材／教具
５分	緊張をほぐす（自分も）	【出席確認】 【プリント配布】 【アイスブレイク】 週末は何をしましたか？ 【目標確認】 自己紹介を聞いたり話したりして、職業・趣味・どこに住んでいるかを理解できる、表現できる		
１分	まだ学んでいない単語や文法を、予測しなんとなく理解する	【理解】 教師の自己紹介を聞き、なんとなく理解してもらう ①教師の自己紹介	予測できるか	PPT
15 分	語彙・文法・表現を理解する	【語彙・文法・表現】 教師の自己紹介に出てきた、もしくはこれから必要となる語彙・文法・表現の導入、説明 ①語彙の導入 ②語彙のイラストを見せながら、当ててもらう ③文法の説明	適切な語彙・文法・表現を理解できるか	プリント、PPT

15 分		【練習】 プリントの問題を解く (10 分)→答え合わせ(５分)		プリント
10 分		【理解】 ①もう一度教師の自己紹介を聞いてもらう(×２) ②自己紹介に関して、問題に答えてもらう ③答え合わせ		プリント、 PPT
	時間があまったら	・アクティビティの説明 ・簡単なアクティビティ(趣味探しなど)		PPT
休憩				
15 分	自己紹介を聞いて、理解する 推測する	【アクティビティ】 『妄想自己紹介』 ①やり方の説明 ②教師が問題を出す ③学生に当ててもらう 時間があまったら 学生たちにやってもらう	自己紹介を聞いて、理解できるか 推測できるか	PPT
25 分	自分について、適切な語彙や表現を用いながら相手に伝える	【表現】 学生にグループで自己紹介をしてもらう クラスの親睦を深める ①場面を提示 ②話すことをプリントにメモ(10 分) ③練習(５分) ④グループの人と自己紹介をし合ってもらう(５分) ※練習問題プリントに相手の情報をメモ ※グループは６人ずつ、３グループ ⑤何人か当て、他己紹介をしてもらう(５分)	自分について、適切な語彙や表現を用いながら相手に伝える事ができるか	プリント、 PPT
10 分		【宿題】 宿題の案内		PPT
宿題	自己紹介動画を撮って、カカオトークで私に送る			

【学生が作成した教案　日本語 A2　Ａさん】

２コマ目

日時	2018 年 9 月 13 日（木）		16:00 ～ 17:50	
氏名	A		指導教員	
対象者	A2 レベルの大学生		授業時間	100 分
授業の目標（課題）	トピック：自分と身近な人々 レベル：A2 〈理解〉　他己紹介やその人の身近な人の話を聞いて、基本的な情報(職業や外見、どこに住んでいるか、趣味など)であれば、理解することができる。 〈やりとり〉自分や身近な人々の職業や外見、また、どこに住んでいるかということについて、相手の協力を得ながら、やりとりができる。 〈表現〉　自分を身近な人々について、短い語句や文を並べて表現できる。			
指導項目	語彙：　外見、かっこいい、かわいい、優しい、楽しい、面白い、怖い、厳しい、暗い、明るい、まじめ[な]、きれい[な] 背、髪、顔、眼鏡、眉毛、目、口、手、足、高い、低い、短い、長い、丸い、四角い 文法：　～そうです			
時間	活動ごとの目標（課題）	活動	活動ごとの評価ポイント	教材／教具
５分	緊張をほぐす（自分も）	【出席確認】 【プリントを配る】		
10 分	今日学ぶことを理解する	【アイスブレイク】【導入】 宿題にして学生に送ってもらった動画を流し、「～そう」を導入 【目標確認】 知らない人のことを聞いたり話したりして、外見、見た目を理解できる、やりとりできる。		PPT、動画
３分	まだ学んでいない単語や文法を、予測しなんとなく理解する	【理解】 場面設定 大学一年生の春、新学期がはじまりました。新しい授業の先生がどんな先生だったかを、同じく日本語を勉強している友達に説明します。 ①見本の動画を流す	予測できるか	PPT
32 分 ５分	語彙・文法・表現を理解する	【語彙・文法・表現】 理解の文に出てきた、もしくはこれから必要となる語彙・文法・表現の導入、説明	予測できるか 適切な語彙・文法・表現を理解できるか	プリント、PPT

7 分 10 分 10 分		①イラストを見せながら、視覚的に語彙の学習(学生に当ててもらう)(名詞→形容詞) ②語彙の問題を解く→答え合わせ ③文法の学習 ④文法の問題を解く→答え合わせ		
休憩				
5 分		【練習】 芸能人の写真を見せ、外見を描写してもらう		
7 分		【練習】 ペアになってスクリプトの会話練習		
35 分	他者のことについて、相手の協力しながら適切な語彙や文法を用いてやりとりする	【やりとり】【ロールプレイ】 場面設定 大学一年生の春、新学期がはじまりました。新しい授業の先生のことを、友達と話しています。 ①ペアを作る ・例を提示(もう一回動画を流す)(スクリプトを表示) ②A、B を決める ③ペアに先生の写真を渡す ④会話をしながら先生について話す ⑤全 10 ペアを当て、前で発表してもらう ⑥ペアごとにどの先生のことを話しているか、会話を聞いてクラス全体で当てる	他者のことについて、学んだ語彙や文法を適切に用いて表現できるか	PPT
2 分		【まとめ】 今日の授業内容の振り返り、一言		PPT
宿題	なし			

【学生が作成した教案　日本語 A2　Ｂさん】

１コマ目

日時	2018 年 9 月 11 日（火）		13:00 ～ 13:50	
氏名	B		指導教員	
対象者	日本語 A2		授業時間	50 分
授業の目標（課題）	自己紹介や身近な人の紹介をできるようになる。特に、趣味、職業、外見について書いたり話したりすることができるようになる。			
指導項目	趣味、職業、外見に関する語彙の学習。また、「○○している」（結果の状態）、「××だそうだ」（伝聞）の文法を学習する。			
時間	活動ごとの目標（課題）	活動	活動ごとの評価ポイント	教材／教具
10 分	名前をカタカナで書く、簡単な自己紹介（学部、学年、名前）を発表する。	ネームプレート作り、出席確認。		A4 用紙
10 分	30 秒程度の動画で簡単なディクテーション。	「新しい先生の話」動画をみる。プリントの問題を解く。	先生の外見、年齢、専攻を聞き取って、プリントを穴埋めすることができる。	プリント、動画
15 分	趣味、職業、外見の語彙を学習する。	PPT に表示された絵と言葉を見ながら語彙の学習。	語彙を発音し、関連する自分の情報を発言できる。	PPT
15 分	動画に登場した、「○○ている」、「××そうだ」文法の学習、演習。	PPT に表示された絵を見ながら、文法の学習。プリントの文法問題を解く。	文法を理解することができる。プリントを読んで理解し、穴埋めすることができる。	
宿題				

日時	2018 年 9 月 11 日（火）		14:00 ～ 14:50	
氏名	B		指導教員	
対象者	日本語 A2		授業時間	50 分
授業の目標（課題）	自己紹介や身近な人の紹介をできるようになる。特に、趣味、職業、外見について書いたり話したりすることができるようになる。			
指導項目	趣味、職業、外見に関する語彙の学習。また、「○○ている」（結果の状態）（習慣）、「××そうだ」（伝聞）の文法を学習する。			
時間	活動ごとの目標（課題）	活動	活動ごとの評価ポイント	教材／教具
15 分	動画に登場した、「○○ている」、「××そうだ」文法の学習、演習。	PPT に表示された絵を見ながら、文法の学習。プリントの文法問題を解く。	文法を理解することができる。プリントを読んで理解し、穴埋めすることができる。	プリント、PPT
10 分	30 秒程度の動画で簡単なディクテーション。	「恋人の話」動画をみる。プリントの問題を解く。	恋人の外見、年齢、専攻を聞き取って、プリントを穴埋めすることができる。	プリント、動画
25 分	ロールプレイを通し、授業で習った文法や語彙を使って、学生同士で会話する。	ロールプレイ「友達に恋人について説明する」を行う。５分間で話すことを準備し、「恋人の話」動画のスクリプトを参考に、二人組で会話をする。	恋人の外見、専攻、職業、趣味について説明できる。	プリント
宿題				

２コマ目

日時	2018 年 9 月 14 日（金）		11:00 ～ 11:50	
氏名	B		指導教員	
対象者	日本語 A2		授業時間	50 分
授業の目標（課題）	自己紹介や身近な人の紹介をできるようになる。特に、趣味、職業、外見について書いたり話したりすることができるようになる。			
指導項目	趣味、職業、外見に関する語彙の学習。また、「○○ている」（結果の状態）（習慣）（動作の継続）、「××そうだ」（伝聞）の文法を学習する。			
時間	活動ごとの目標（課題）	活動	活動ごとの評価ポイント	教材／教具
５分		出席確認		
30 分	語彙と文法を復習する。	PPT を見ながら前回の語彙、文法を確認。「○○ている」の追加用法「動作の継続」の学習。普通体の復習。	前回の授業を理解できている。普通体を理解できている。	プリント、PPT
15 分	文法の問題演習をし、文法を定着させる。	プリント演習、答え合わせ	プリントを穴埋めすることができる。	プリント
宿題	なし			

日時	2018 年 9 月 14 日（金）		12:00 ～ 12:50	
氏名	B		指導教員	
対象者	日本語 A2		授業時間	50 分
授業の目標（課題）	自己紹介や身近な人の紹介をできるようになる。特に、趣味、職業、外見について書いたり話したりすることができるようになる。			
指導項目	趣味、職業、外見に関する語彙の学習。また、「○○ている」（結果の状態）（習慣）（動作の継続）、「××そうだ」（伝聞）の文法を学習する。			
時間	活動ごとの目標（課題）	活動	活動ごとの評価ポイント	教材／教具
15 分	文法の問題演習をし、文法を定着させる。	プリント演習、答え合わせ	プリントを穴埋めすることができる。	プリント
10 分	チューター申請書に登場する語彙を学習する。既出の語彙を使う。	PPT を見ながら前回の語彙、文法を確認。「○○ている」の追加用法「動作の継続」の学習。普通体の復習。	新出の語彙を理解する。チュータ申請書の書式にのっとり、自分の情報を書くことができる	プリント、PPT
15 分	面接官としてチューターに質問をする。チューターとして自己紹介をする。	チューター申請書と、面接官用紙を用いて、二人組で模擬面接を行う。面接官役とチューター役は入れ替わって、２回行う。	自然な流れで日本語の会話ができる。ペアの話を聞き取ってメモをすることができる。	プリント
10 分	緊張感を持って模擬面接をする。他の学生ペアの話を聞く。	クラスの前でペアごとに全員が模擬面接の様子を発表する。	自然な流れで日本語の会話ができる。	
宿題	なし			

【学生が作成した教案　日本語 B1-1　Ｃさん】

１コマ目

日時	2018 年 9 月 10 日（月）		12:00 ～ 12:50	
氏名	C		指導教員	
対象者	B1-1		授業時間	50 分
授業の目標（課題）	目上の人/初対面の人に自分の家族を紹介する			
指導項目	トピック１　「自分と身近な人々」 ・性格・外見を表す表現 ・身の回りの人を紹介する表現 ・敬語表現			
時間	活動ごとの目標（課題）	活動	活動ごとの評価ポイント	教材／教具
10 分	（・学生の顔と名前を一致させる） ・これからの活動に向けたウォーミングアップ	**アイスブレイク** **出席確認** **発声練習** 「あさひがあかいよあいうえお～」のあ～な行	・出席の有無 ・しっかり声を出せているか	PPT
15 分	身近な人の外見や性格を表す語彙のバリエーションを増やす 【理解】	**性格・特徴を表す表現の確認** ① ポートフォリオの音読 ② 人の性格や外見にちなんだイラストを PPT で見せて、意味を簡単に確認する 声に出してみることで、イントネーションも把握する	・積極的に日本語を声に出しているか	ポートフォリオ PPT
15 分	目上の人・初対面の人に身近な人を紹介する表現（やりとり）の流れを理解し、実践する 【理解・やりとり】	**大学の先生に自分の家族を紹介するという内容のダイアログを読む** ① 先生が一度音読 ② 先生の後に続いて反復する ③ ペアを作って、ダイアログの２役に分かれて音読する	・イントネーションや文型などに気をつけているか ・大きくはっきりとした声で音読が出来ているか	プリント

10 分	敬語表現・身近な人を紹介する表現を理解する【理解】	**ダイアログに登場した表現の解説** ① 人を紹介する時に用いる表現（～なところがあります、○○が得意です） ② 丁寧語や、ほか目上の人に対して使う表現 PPT にダイアログでどのように文型が使われているかを明示し、プリントのダイアログに印をつけてもらう	・適宜、適切にプリントにメモ（マーク）が取れているか ・積極的に発言しているか	PPT プリント ホワイトボード
宿題	なし			

日時	2018 年 9 月 10 日（月）		13:00 ～ 13:50	
氏名	C		指導教員	
対象者	B1-1		授業時間	50 分
授業の目標（課題）	目上の人/初対面の人に自分の家族を紹介する			
指導項目	トピック１　「自分と身近な人々」 ・短所を表す表現			
時間	活動ごとの目標（課題）	活動	活動ごとの評価ポイント	教材／教具
３分	（「表現」の活動に向けて） 目上の人・初対面の人に身近な人を紹介する表現（やりとり）の流れを再確認する 【理解】	**ダイアログをもう一度皆で音読する**	・イントネーションや文型などに気をつけているか ・大きな声で音読が出来ているか	プリント
７分	短所を表す表現を理解する 【理解】	**短所を表す表現の解説** ・〇〇が苦手であることを表す表現（得意ではない、下手である、〇〇音痴） ・ほか短所やネガティブな性格を表す表現 ・性格を表すイラストとともに語彙を理解できるようにする	・予習をしていることが見られるか ・積極的に発言できているか	PPT プリント ホワイトボード
20 分	・目上の人・初対面の人に自分の家族を文章として紹介する ・ダイアログを作る 【表現】	**自分の家族を目上の人に紹介するダイアログを作る** ・授業で教わった性格や外見を表す表現・身近な人を紹介する表現・敬語表現を生かしたダイアログを作る ・身近な人の性格に説得力を持たせられるようなエピソードを混ぜる	・授業で習った語彙や文型を作文に反映できているか ・性格の表現に合ったエピソードを出しているか ・身近な人を紹介する外見・性格の表現の順序が守られているか	プリント

			・A2 までで学習してきた語彙・文法を正しく運用できているか	
12 分	目上の人・初対面の人に自分の家族を声に出して紹介する 【やりとり】	**作ったダイアログを、ペアで音読しながら添削する** （ダイアログは授業終了時に提出）	・授業の指示を理解し、お互いの文章を添削する力があるか ・はっきりとした声や正しいイントネーションで音読ができているか	プリント
6 分	物語の登場人物の性格を考える 【理解】	**「うさぎとかめ」のそれぞれの登場人物の性格を表す言葉を考える** 皆でどのような言葉が当てはまるか意見を出し合ってみる 宿題「「したきりすずめ」のキャラクターの性格を考える」で課されていることを理解する	・授業の指示を理解し、適当な言葉を発言することができるか ・積極的に発言できているか	プリント
宿題	昔話「したきりすずめ」の登場人物の性格を表現する 次回漢字テスト （先生はダイアログの添削）			

２コマ目

日時	2018 年 9 月 12 日（水）		12:00 ～ 12:50	
氏名	C		指導教員	
対象者	B1-1		授業時間	50 分
授業の目標（課題）	自分の家（部屋）を友人に紹介し、その家の問題点をあげることができる			
指導項目	トピック２　住まいと住環境 ・日本と韓国の住まいの違い ・住まいに関する用語			
時間	活動ごとの目標（課題）	活動	活動ごとの評価ポイント	教材／教具
７分	・生徒の顔と名前を一致させる ・これからの活動に向けたウォーミングアップ	**アイスブレイク** **出席確認** **発声練習** 「あさひがあかいよあいうえお～」のあ～な行	・出席の有無 ・しっかり声を出せているか	PPT
15 分	他人を紹介する表現を理解し、様々な観点から表現する 【理解・表現】	**前回の授業の復習** ・宿題の確認 （学生間で確認させた後に、皆で確認する） ・作文で間違いが多かった部分の補足やユニークな回答の紹介	・宿題をちゃんとやってきているか ・復習をしている形跡が見られるか ・積極的に発言しているか	プリント PPT ホワイトボード
８分	住まいと住環境について、現時点でどのくらい理解しているか確認する 【理解・表現】	**トピックの導入** **自分の家について、どのくらい説明できるか** （知っている単語を 2 分ぐらいで個人で羅列してもらう。書けた単語の個数をペアで数える。この個数を、学生に「〇〇個以上挙げられたチームはありますか？」など質問して把握する）	・自分の知る限りの単語（A2 までで習った単語）を定着させているか	プリント
10 分	日本と韓国の住まいの相違点を理解する 【理解】	**トピックの導入** **日本と韓国の住まい事情を説明** ① アパートとマンション ② 風呂とお手洗いの配置について ③ 両国の憧れの住ま	・先生の話を聞き、自分なりにまとめることができるか	PPT

		いについて ＋穴埋め式のまとめ		
10 分	住まいまつわる表現を理解する 【理解】	**用語の確認** PPT の図などを用いながら、外装・内装・間取りなど住まいに関する語彙を視覚的に理解する 声に出してみることで、イントネーションも把握する	・予習している形跡が見られるか ・積極的に日本語を声にだしているか	プリント PPT
宿題	漢字テストの準備			

日時	2018 年 9 月 12 日（水）		13:00 ～ 13:50	
氏名	C		指導教員	
対象者	B1-1		授業時間	50 分
授業の目標（課題）	自分の家（部屋）を友人に紹介し、その家の問題点をあげることができる			
指導項目	住まいと住環境 ・家を紹介する言い回し・文型 ・家具・家電に関する用語			
時間	活動ごとの目標（課題）	活動	活動ごとの評価ポイント	教材／教具
10 分	トピック１に登場した漢字を定着させる	**漢字テスト**	・漢字テストの得点	プリント
7 分	自分の家を紹介する表現（やりとり）の流れを理解する 【理解】	**ダイアログを読む** ① 先生が一読 ② 先生の後に反復してもらう	・イントネーションなどに気をつけているか ・はっきりと大きな声で音読が出来ているか	プリント
13 分	自分の家を紹介する際に用いる語彙・文型を理解する 【理解】	**ダイアログに登場する表現・文法の紹介** ・自分の部屋の紹介・問題点を表す言い回し （最寄り駅から〇〇分、近くに〇〇があります、窓から〇〇が見えますなど） ・基本的な家具・家電の名前の確認 ・日本家屋の紹介	・適宜プリントにメモが取れているか ・積極的に発言しているか ・A2 までに習った単語を定着させられているか	PPT プリント
15～20 分	自分の家を紹介し、問題点を挙げる 【やりとり・表現】	**自分の部屋を紹介し、問題点を挙げてみる** ① 自分の家（現在寮に住んでいる場合は実家）の間取りを描いてみる ② ペアワークでお互いに紹介し、やりとりする。聞き手に回っている学生は質問リストに沿	・実習生の指示を聞き、ワークができているか ・自分の言葉で部屋の紹介ができているか ・相手が紹介する際に適切な質問ができ	プリント

		って質問をする。 ③　何人か当てて、皆の前で自分の家を紹介してもらう	るか ・クラスメイトの質問に対して、適切な受け答えができるか	
宿題	なし			

【学生が作成した教案　日本語 B1-1　Ｄさん】

１コマ目

日時	2018 年 9 月 11 日（火）		14:00 ～ 14:50	
氏名	D		指導教員	
対象者	B1-1		授業時間	50 分
授業の目標（課題）	病気やケガの経緯や状況（発症時期・ケガの発生状況）について、やりとりができる			
指導項目	からだと健康 ・日本に長期交換留学中、ケガをして病院に行くことになった時に、医師におおよその状況を説明することができる。 語彙 患者、医師、看護師、手術、骨折、骨を折る、ねんざ、転ぶ、やけど、腫れる、くしゃみ、くしゃみをする、頭痛、ズキズキする、クラクラする、腹痛、お腹が痛い、熱がある、熱を計る、熱が高い 文法 ～そう（です）			
時間	活動ごとの目標（課題）	活動	活動ごとの評価ポイント	教材／教具
10 分	出欠確認 アイスブレイク	・出欠確認 ・グループ分け ・ネームカード作成		ネームカード作成用の紙 油性ペン
５分	導入	・場面設定 日本に長期交換留学中、ケガをして病院に行くことになった時の状況を想定し、説明する	・場面設定の内容を理解できるかどうか	PPT
15 分	授業の目標確認、トピックになじむ	・Can do の確認 ・病気やケガに関する語彙や表現の確認（プリントの穴埋め）	・この課で扱う単語を日本語で理解できるかどうか	PPT プリント
15 分	ロールプレイを通じてケガの経緯や状況について、やりとりができる	・ロールプレイ クラス全体で確認した後、２人１組になり練習を行う ・ロールプレイで学んだことを基に、実際に病院に行ったことを想定し、ペアでやりとり	・語彙や表現を活用できるか ・ロールプレイを通して、目標への理解を深めることができるか	PPT プリント

		を行う		
５分	文法説明	・「～そうです」の説明と使われ方の確認	・文法を理解し、活用できているか	PPT
宿題	なし			

<table>
<tr><td>日時</td><td colspan="2">2018 年 9 月 11 日（火）</td><td colspan="2">15:00 ～ 15:50</td></tr>
<tr><td>氏名</td><td colspan="2">D</td><td>指導教員</td><td></td></tr>
<tr><td>対象者</td><td colspan="2">B1-1</td><td>授業時間</td><td>50 分</td></tr>
<tr><td>授業の目標（課題）</td><td colspan="4">処方された薬の種類やそれをいつ、一日に何回飲めばよいかの簡単な説明を聞いて理解し、袋や箱に書かれた表示を読んで理解することができる。</td></tr>
<tr><td>指導項目</td><td colspan="4">からだと健康
・日本に長期交換留学中、ケガをして病院に行くことになった時に、医師におおよその状況を説明することができる。
・医者から処方された薬を薬局で受け取り、薬剤師の簡単な説明を聞いて理解できる。
・薬の袋や箱に表示されている内容を理解できる。
語彙
処方、処方せん、処方薬、薬剤師、薬局、用法、用量
文法
～たら</td></tr>
<tr><td>時間</td><td>活動ごとの目標（課題）</td><td>活動</td><td>活動ごとの評価ポイント</td><td>教材／教具</td></tr>
<tr><td>10 分</td><td>ロールプレイ（PART2）を通じて、病気の経緯や状況について、やりとりができる</td><td>・ロールプレイ
クラスで確認した後、２人１組になり練習を行う
・時間があれば、いくつかのペアに発表してもらう
・新しい語彙の確認</td><td>・語彙や表現を活用できるか
・ロールプレイを通して、目標への理解を深めることができるか
・この課で扱う単語を理解できるかどうか</td><td>PPT
プリント</td></tr>
<tr><td>３分</td><td>授業の目標確認</td><td>・Can do の確認</td><td>・この課の目標を理解できるかどうか</td><td>PPT</td></tr>
</table>

20 分	処方された薬の種類やそれをいつ、一日に何回飲めばよいかの簡単な説明を聞いて理解できる	・薬剤師役（私）と患者役（生徒）になり、薬剤師が薬に関する説明をする（説明を聞きながら、配布するプリントの問題に答えてもらう） ・答えあわせ （班のメンバーで答え合わせ→全体で答えあわせ ※問３～５の答えはホワイトボードに書いてもらう）	・処方された薬の説明を聞いて理解することができるか ・グループ活動に積極的に参加しているか	PPT プリント
10 分	薬の袋や箱に表示されている説明を読んで、理解できる	・「薬局」の説明、語彙や表現の確認 ・動画視聴 ・プリントの音読（クラス全体）	・語彙や表現を活用できているか ・薬の裏に書かれている説明を読んで理解できるか	PPT プリント
７分	文法の確認 まとめ	・「～たら」の説明と使われ方の確認 ・今日の要点をおさらい ・次回予告	・文法を理解し、活用しようとしているか ・今日の要点を復習できたか	PPT
宿題	自分が経験した大変だった病気やケガについて次回の授業までに考えておく。			

２コマ目

日時	2018 年 9 月 13 日（木）		15:00 ～ 15:50	
氏名	D		指導教員	
対象者	B1-1		授業時間	50 分
授業の目標（課題）	自分が経験した大変だった病気やケガについて、思い出しながら複数の例を挙げたりエピソードを交えたりして表現することができる。			
指導項目	からだと健康 ・日本に長期交換留学中、授業が一緒で仲良くなった友人に、自分が経験し、印象に残っている病気もしくはケガについて、その時のエピソードを交えながら伝えることができる。			
時間	活動ごとの目標（課題）	活動	活動ごとの評価ポイント	教材／教具
８分	出欠確認 授業の復習	・出欠確認 ・語彙、表現を中心に前回の授業の復習を行う	・前回の授業で扱った語彙や表現を理解できているか	PPT
12 分	授業の目標確認、トピックになじむ	・Can do の確認 ・場面設定 ・経験し大変だった自分のケガのエピソードを伝える ・語彙確認	・場面設定の内容を理解できるかどうか ・新しい語彙を日本語で正しく理解できるか	PPT
10 分	スピーチメモを作成する	・自分が経験して大変だった病気やケガ(特に無い人は、最後に病院に行った時の症状)について、配布するプリントにまとめてもらう	・自分の経験を表現できているか ・この課で学習した語彙や表現、文法を活用できているか	PPT プリント
18 分	スピーチの台本を作成する	・スピーチメモでまとめた内容を参考に、エピソードなどをより深め、スピーチの台本を作成する	スピーチメモを基に、自分の考えを纏めることができるか	プリント
２分	班（グループ）に分かれる	・４人１組 合計５つの班に分かれる		
宿題	なし			

日時	2018 年 9 月 13 日（木）		16:00 ～ 16:50	
氏名	D		指導教員	
対象者	B1-1		授業時間	50 分
授業の目標（課題）	自分が経験した大変だった病気やケガについて、思い出しながら複数の例を挙げたりエピソードを交えたりして表現したことをクラスメイトに伝えることができる。			
指導項目	からだと健康 ・日本に長期交換留学中、授業が一緒で仲良くなった友人に、自分が経験し、印象に残っている病気もしくはケガについて、その時のエピソードを交えながら伝えることができる。			
時間	活動ごとの目標（課題）	活動	活動ごとの評価ポイント	教材／教具
５分	スピーチの練習	・スピーチの台本を実際に読んで練習する(個人) ・台本がまだ完成していない人はこの時間に仕上げを行う	・積極的に練習に取り組むことができているか	PPT プリント
10 分	班のメンバーに自分が経験して大変だった病気やケガについて伝える	・４人１組の班で１人ずつ自分が書いた原稿をもとにエピソードを話す（１人２分で発表） ・発表を聞いていたメンバーは感想を伝える ・班全員の発表が終了したら、グループの代表者を１名決める	・台本を基に自分が書いたエピソードを相手に表現することができているか	PPT
25 分	発表会	・班の代表者(合計５名)の発表を行う。 ・発表の後には、質問コーナーを設け、疑問に思ったことを質問してもらう。 （予め担当の班を決め、質問をする）	・自分のエピソードを共有することができるか ・話を聞く中で、疑問に思ったことを質問できるか	PPT
10 分	ふり返り	ふり返りシートの記入		プリント
宿題	なし			

【学生が作成した教案　日本語 B1-1　Ｅさん】

１コマ目

日時	2018 年 9 月 10 日（月）		16:00 ～ 16:50	
氏名	E		指導教員	
対象者	B1-104		授業時間	50 分
授業の目標（課題）	〔表現〕自分の長所と短所について、面接の場に合った言葉を使ってわかりやすく説明することができる。 〔やりとり〕面接官と学生になりきって、長所と短所についてのやりとりをすることができる。			
指導項目	面接でよく使われる長所・短所に関する単語の意味と使い方。			
時間	活動ごとの目標（課題） ●学習者の目標 ○実習生の目標	活動	活動ごとの評価ポイント	教材／教具
５分	○教室全体の緊張感をほぐす。	● 出席確認をする。 ● アイスブレイクで、改めて簡単に自己紹介をする。	実習生が学習者の興味をひけているか。	なし
５分	●前回の授業で触れた単語を覚えていることに自信を持つ。 ○学習者がどの程度単語を覚えているか確かめる。	● 単語のクイズをする（10 問）。 ● 全問正解だった人に手を挙げてもらう。	単語を全部覚えていた人をほめる。	パワポ
５分	●インターンシップの具体的なイメージを持つ。 ●インターンシップを知らない生徒に、インターンシップに参加してみようという気持ちにさせる。 ○韓国の文化について、学習者とのコミュニケーションを通して教えてもらう。	● インターンシップに参加したことがあるかを聞く。 ● インターンシップとは何か、何をするのかを確認する。 ● 初めて知ったこと、日本と韓国のちがいについてメモをしてもらう。あとで、実習生が質問したときに、教えてもらう。	実習生の説明に興味を持ち、メモをしているか。	パワポ
10 分	●学習者自身が今の時点で、自分が文章をどのくらい書けるかを確認する。	● 導入：「日本語を書くのは得意ですか。」と聞く。 ● 自分の長所と短所について短い文章	プリントの枠に、単語ではなく文章が書かれているか。	プリント

	○教室全体を回って、学習者の作文のレベルを確認する。	を書く（３分） ● 隣の人と、どのようなことを書いたか、どんな単語を調べたかを共有する。（１分～２分） ● 「どんな単語が出てきたか」「書いてみて、どう思ったか」３人くらいに聞いてみる。（３分）出てきた単語をホワイトボードに写す。	（書いていない生徒には、理由を聞く。書くことの重要性を伝える。）	
15 分	●自分でわからない単語を見つけ、調べることが出来る。 ●クラスメートと協力しながら、単語の意味を理解することが出来る。 ●楽しみながら、単語に慣れ親しむことが出来る。 ○単語を正しく理解できているか、例文を示しながら確認する。	● プリントの単語を調べてきた人はいるか、手を挙げてもらう。 ● まずは、パワーポイントで漢字の読み方を確認する。（３分） ● そのあと、自分でわからない単語をピックアップして調べてもらう。（３～５分） ● 隣の人とわからない単語がないか確認する。（３分） ● 学習を終えたら、絵を見たら単語の意味が言えるか、一つずつ確認をする。楽しみながら単語に慣れてもらう。最後にまとめてランダムに意味を言わせる。（５分）	予習をしている意欲のある学習者を評価する。 単語を思い出そうと努力しているか。（まったく声を出していない人はいないか。）	パワポ プリント
10 分	●文章を音読しながら、内容を理解する努力をする。 ●はっきりと、大	会話の文章を音読練習する。（１回目は、文章を理解するためにゆっくり音読をする。２回	実習生の指示通りに、工夫をして音読ができ	

	きな声で音読をする。 〇目的に合わせて、ゆっくり読んだり、はっきり読んだりと、違いがはっきり分かるように音読をする。	目は発音（はっきりと、聞き取りやすいように）に注意して音読をする。	ているか。	
宿題	なし			

日時	2018 年 9 月 10 日（月）		17:00 ～ 17:50	
氏名	E		指導教員	
対象者	B1-104		授業時間	50 分
授業の目標（課題）	〔表現〕自分の長所と短所について、面接の場に合った言葉を使ってわかりやすく説明することができる。 〔やりとり〕面接官と学生になりきって、長所と短所についてのやりとりをすることができる。			
指導項目	例文の単語、文法			
時間	活動ごとの目標（課題）	活動	活動ごとの評価ポイント	教材／教具
２分	●休憩時間の後に、もう一度集中力を取り戻してもらう。	● もう一度発音に注意しながら音読をする。	大きな声で読めているか。	
15 分	●ダイアログの意味内容を理解できる。	● 分からない単語を３分で調べる。 ● １文ずつ分けて文章を読んで、わからない単語はないか聞く。	文章を辞書や実習生の助けを得ながら理解できるか。	パワーポイント プリント ホワイトボード
３分	●理解した文章を、気持ちを込めて音読する。	● クラスのメンバーを半分に分けて、面接官と学生に分ける。気持ちを込めて、臨場感を持って音読する。	気持ちを込めて音読できているか。	プリント
15 分	●教えた単語を使って、長所と短所について文章で書ける。	● 自分自身の長所と短所について、考えてまとめる。 （目安：長所７分、短所７分） （終わらなかったら、時間を延長する。）	自分の長所と短所について、伝わりやすい文章を作ることが出来る。	プリント
５分	●自分の長所と短所について、メモを見ながら話すこ	● ペアを作って、考えた原稿をもとに、	メモを見ながら、相手の目を見て話せている	プリント

	とが出来る。	会話練習を行う。本当に面接をしているような気分で行う。	か。	
10 分	●ロールプレイで行ったことを文章にすることが出来る。 ○困っている人がいたら、面接で行ったことを聞きなおして、助け舟を出す。	● 提出用プリントに、ロールプレイの内容を文章で書いてもらう。 ● 漢字テストの予告、プリントの配布	回収をして、文法や単語の使い方が正しいか添削する。	プリント
宿題	作文を提出、漢字テスト			

２コマ目

日時	2018 年 9 月 13 日（木）		12:00 ～ 12:50	
氏名	E		指導教員	
対象者	B1-104		授業時間	50 分
授業の目標（課題）	〔理解〕住居の大きさや構造に関する説明を辞書を使って読んだり事前に関係情報を得たりして、理解できる。 〔やりとり〕部屋の特徴や構造についてやりとりができる。 〔表現〕住居についてある程度まとまった内容を簡単な語句を並べて説明できる。			
指導項目	LDK の表記の仕方の復習、住宅や部屋の種類、家具や電化製品の単語の復習、建物の階の説明			
時間	活動ごとの目標（課題） ●学習者の目標 ○実習生の目標	活動	活動ごとの評価ポイント	教材／教具
５分	○元気にあいさつをして、教室の緊張を和らげる。	あいさつ、出席確認をする。 ウォーミングアップの音読練習をする。	出席確認をすると同時に、学習者の調子を確認する。	パワーポイント
10 分	●学習者が、自分の間違えた部分に気付くだけでなく、日本語でよく使われる言い回しを知ってもらう。	作文を返却し、作文添削の解説をする。（どのような基準で採点したか、どのようなことに注意してほしいか。）	学習者が間違えに気付いたり、新たな言い回しを理解したりすることが出来るか。	パワーポイント
２分	●前回の授業のトピックから、今回の授業のトピックへと頭を切り替える。	学習者に、授業の目標を音読してもらう。出席簿を見て、だれに読んでもらうかを指名する。	学習者が初めて見る文章を音読することが出来るか。	パワーポイント
10 分	●A2 の住まいと住環境で扱う単語を思い出す。	● ウォーミングアップで、穴埋め問題をする。（4 分）単語を思い出す作業をしてもらう。（2 分 30 秒） ● ペアで、隣の人と書いたことを共有する。（2 分） ● 部屋に関する単語をパワーポイ	A2 までに学習した内容が定着しているか。	

		ントを使って復習する。また、教室を使って、廊下、壁、天井などの単語を復習する。		
５分	●日本の旅館やホテルに興味・具体的なイメージを持つ。	● 導入「日本のホテルに宿泊したことがありますか？それは洋室でしたか、和室でしたか？」と質問をする。 ● 実習生がアルバイトをしているホテルについて紹介する。	日本のホテルに具体的なイメージ、興味を持つことが出来たか。	パワーポイント
５分	●音読練習をすることで、日本語の音に慣れる。	● キムさんの日記を音読練習をする。実習生が読んだ後に、続けて生徒が読む。１回目はゆっくり、意味を理解するつもりで読む。２回目は少し早めに読む。	学習者が音読練習の意義を理解し、全員が声を出すことが出来たか。	プリント
10 分	●例文に出てきた単語や文型を理解し、自分が使えるようになる。	キムさんの日記を一文一文読みながら、文法と単語の解説をする。	例文に出てきた単語と文型を理解して使えるようになるか。	プリント パワーポイント
５分	●「～階建て」、「～階に…がある」の新しく学んだ表現を使って、建物について説明できる。	● 〔表現〕大学のＤ棟について、習った単語と知っている単語を使って、３文以上で説明する。（全員で考える）	積極的に発言をした人は評価する。	プリント
宿題	なし（漢字テストの予告をする）			

日時	2018 年 9 月 13 日（木）		13:00 ～ 13:50	
氏名	E		指導教員	
対象者	B1-104		授業時間	50 分
授業の目標（課題）	〔理解〕住居の大きさや構造に関する説明を辞書を使って読んだり事前に関係情報を得たりして、理解できる。 〔やりとり〕部屋の特徴や構造についてやりとりができる。 〔表現〕住居についてある程度まとまった内容を簡単な語句を並べて説明できる。			
指導項目	和室に関する単語、～に○○があります、自分の部屋についてのやりとり			
時間	活動ごとの目標（課題） ●学習者の目標 ○実習生の目標	活動	活動ごとの評価ポイント	教材／教具
８分	●日常生活で使う単語を覚える。	漢字のミニテストを行う。	前もって勉強してテストに取り組むことが出来たか。	プリント
７分	●音読をして、文章の内容を理解する。日本語の音に慣れる。 ○クラス全体に目を向けて、音読できていない人に目を向ける。	キムさんの日記を音読する（２回） １回目はゆっくりと、理解するために読む。 ２回目は、クラスを前と後ろの半分に分けて、音読する。	全員が音読することが出来ていたか。	プリント
５分	●日本の部屋にあるものの単語を知る。合わせて、日本の文化を理解する。	日本の和室についての単語を、洋室についての単語と比較しながら紹介する。	和室や洋室に関する単語を写真や絵を見て理解することが出来たか。	プリント パワーポイント
10 分	●例文の単語と文型を理解することができる。 日本の和室についての文を読み、日本の和室のイメージをもつ。	例文を読みながら、単語と文型を改めて説明する。	単語と文型を理解することが出来たか。	プリント パワーポイント
８分	●自分の部屋、家での過ごし方について説明すること	ペアになって、やり取りをする。	相手にわかりやすく、説明することが出来てい	プリント

	が出来る。		るか。	
10 分	●日本語での発表の機会に慣れる。 ●住んでいるところについてクラスで共有することで、お互いのことを知るきっかけにする。	何組か前に出てきて、ペアでのやりとりを発表する。	発表している人の話を聞いているか。 皆に聞こえるような声で発表しているか。	
２分		最後の授業なので、お礼とあいさつをする。		
宿題	なし			

【学生が作成した教案　日本語 B1-2　Ｆさん】

１コマ目

日時	2018 年 9 月 12 日（水）		16:00 ～ 16:50	
氏名	F		指導教員	
対象者	B1-2 クラス（CJP122－01 受講者 21 名）		授業時間	50 分
授業の目標（課題）	理解：他人の自己紹介やその人の身近な人の特徴（好き嫌い、得意・不得意）を聞いて、理解することができる。 やりとり：自分や身近な人々の特徴（好き嫌い、得意・不得意）について、複数の例をあげたり、エピソードを交えたりしながらやりとりができる。 表現：自分や身近な人々の特徴（好き嫌い、得意・不得意）について、複数の例をあげたり、エピソードを交えたりしながら表現することができる。 →<u>他人の自己紹介を聞いてその人の特徴を理解することができる</u>			
指導項目	語彙と表現			
時間	活動ごとの目標（課題）	活動	活動ごとの評価ポイント	教材／教具
２分	挨拶とトピックの目標確認	・名乗る。 （S2）トピック紹介 （S3）ポートフォリオの目標ページを開き、日本語で読んでもらう。韓国語の目標も表示。		ポートフォリオ
５分	グループ分けと出席確認	グループ分けをする。 （４人×４グループ、５人×１グループ） グループで固まり、机をくっつける。		名簿
７分	アイスブレイク	（S4）休日のお昼ご飯は何を食べますか？ グループで話し合う。		
18 分	語彙と表現を理解する	・何を食べるか学生に聞き、教えてもらう。 →それは好きな食べ物ですか？　嫌いな食べ物は何ですか？　好き嫌いがあるんですね／ないんですね ・・・「好き嫌い」の説明をする。 ・一枚目のプリントを配る。 ・語彙リストを見ながら、それぞれの語彙と使い方について隣の人と話		１枚目のプリント１ページ

		して確認する。（２分） その後、説明を聞きたい単語を聞き、それについて説明する。		
18 分	他人の自己紹介を聞いて、その人の特徴を理解する	場面１：あなたは、お茶の水女子大学で開かれる国際交流の短期プログラムに参加します。今日はプログラム初日です。同じグループの人に１人２分程度の自己紹介をする時間があります。 ・(S16) 場面１を全員で読む。 ・(S17) ■聞きましょう課題の説明。プリントを見て、聞き取る項目を確認する。聞き取る際のメモは韓国語でも構わないが、記入欄には日本語で書くよう伝える。 ・(S18) １人目の日本人の自己紹介･･･自己紹介をする。聞いた後に記入欄に書くための時間を設ける。 ・(S19) ２人目の日本人の自己紹介･･･自己紹介動画を流す。聞いた後に記入欄に書くための時間を設ける。 ・(S20～22) 答え合わせ。１つずつ聞き、学生に答えてもらう。	・自己紹介を聞きとることができるか ・聞いた内容を理解することができるか	１枚目のプリント２ページ
宿題	なし			

日時	2018年9月12日（水）		17:00 ～ 17:50	
氏名	F		指導教員	
対象者	B1-2レベル（CJP122－01受講者21名）		授業時間	50分
授業の目標（課題）	理解：他人の自己紹介やその人の身近な人の特徴（好き嫌い、得意・不得意）を聞いて、理解することができる。 やりとり：自分や身近な人々の特徴（好き嫌い、得意・不得意）について、複数の例をあげたり、エピソードを交えたりしながらやりとりができる。 表現：自分や身近な人々の特徴（好き嫌い、得意・不得意）について、複数の例をあげたり、エピソードを交えたりしながら表現することができる。 →詳しく分かりやすい自己紹介ができるようになる			
指導項目	いい自己紹介にするためのポイント（詳しく話す・分かりやすい順番で話す）			
時間	活動ごとの目標（課題）	活動	活動ごとの評価ポイント	教材／教具
20分	いい自己紹介にするにはどうしたらいいか考える →詳しく、かつ分かりやすく話すためのポイントを理解する	自己紹介のスクリプトと２枚目のプリントを配る。 ■考えてみましょう ・(S23) どちらの方がいい自己紹介だと思いますか？　当てはまる方に手を挙げてもらう。 ・どうして一人目の方がいい自己紹介だと思うかスクリプトを見て考えてもらう。二人目の自己紹介のスクリプトには、よくないと思うところに線を引かせる。 （様子を見て） ・グループで話し合ってもらう。（５分） ・どこに線を引いたか・どうして引いたのか数人に聞く。いい答えがあればそのまま学生に説明してもらう。 ・(S24～S26) 二人目の自己紹介のスクリプトを表示。どこがよくなかったのか確認する。 ・(S27・28) 一人目・二人目の自己紹介の特徴を		スクリプト、２枚目のプリント３ページ

		まとめる。 ・(S29・30) １つ目のポイント：詳しく話す。 ・・・詳しく話すためにはどのようなことを言えばいいか、ひとつずつ項目を確認していく。 ・(S31) ２つ目のポイント：分かりやすい順番で話す・・・例文を読み、どんな順番になっているか説明。		
30 分	いい自己紹介のポイントを反映させ、詳しく・分かりやすい自己紹介ができるようになる	■話しましょう：(S32) あなたが自己紹介をする番になりました。自分のことがよく相手に伝わるように自己紹介してください。 ・例文を全員で読む。 ・個人で自己紹介を考える。(８分) ・グループの人に自己紹介。(10 分) ・各グループから１人発表。	詳しく・分かりやすい順番で書くことができているか（具体例やエピソードを入れることができているか)	２枚目のプリント４ページ
宿題	なし			

２コマ目

日時	2018 年 9 月 14 日（金）		14:00 ～ 15:50	
氏名	F		指導教員	
対象者	B1-2 クラス（CJP1122-01 受講者 21 名）		授業時間	50 分
授業の目標（課題）	理解：他人の自己紹介やその人の身近な人の特徴（好き嫌い、得意・不得意）を聞いて、理解することができる。 やりとり：自分や身近な人々の特徴（好き嫌い、得意・不得意）について、複数の例をあげたり、エピソードを交えたりしながらやりとりができる。 表現：自分や身近な人々の特徴（好き嫌い、得意・不得意）について、複数の例をあげたり、エピソードを交えたりしながら表現することができる。 →自分の大学の学生の特徴について、分かりやすい順番で詳しく説明することができる			
指導項目	・いい自己紹介の書き方の復習 ・自分の大学の学生の特徴をどのように考えるか			
時間	活動ごとの目標（課題）	活動	活動ごとの評価ポイント	教材／教具
５分	学生同士のサポートの促進、話す場の提供	グループ分けをする。		グループ分け後、１枚目のプリントを配布。前回１コマで帰った人と休んだ人には前回のプリントも配る。
５分	・アイスブレイク ・日本の大学について知る	お茶の水女子大学クイズグループ対抗。３問出題。１問ごとに話し合う時間を設ける。	グループで話し合えているか	ペンを使用
16 分	・前回の復習 ・前回習ったことを活かして自己紹介を書く	場面２：日本人の友達に勧められたので twitter を始めました。プロフィールを作りましょう。 （S5）場面を全員で読む （S6）例のプロフィールを全員で読む。読んだ後、内容の確認。 ■考えましょう 「このプロフィールのいいところはどんなところですか？　前回は自己紹介について勉強しました	・前回の授業のポイントを理解しているか ・そのポイントを反映してプロフィールを書くことができるか	１枚目のプリント１ページ

		よね。」 ・前回使用したスライドを表示し、いい自己紹介にするためのポイントを確認 （S7）「どっちの方がいい自己紹介でしたっけ？いい自己紹介にするためのポイントが２つありましたよね。」 （S8・9）１つめのポイント：詳しく話す （S10）２つめのポイント：分かりやすい順番で話す ③グループで教え合う 「●●さんのプロフィールのいいところはどんなところですか？　さっき確認したことがヒントです。この前の授業で最後までいた人は、いなかった人に教えてあげましょう。」（３分ほど話し合う） ④書きましょう テーマを一つ選び、それについてのプロフィールを書く。（10 分ほど）		
24 分	身近な人＝同じ大学の学生について話し、説明することができる	場面３：日本から来た留学生のチューターになりました。あなたの大学に通う学生達の生活について説明しましょう。 （S12）例を全員で読む （S13・14）お茶猫の写真を元に例の内容を説明 （S15）この話をお茶大生に話したら、きっとこう言われると思います。「わかる～！」	・自分の大学の学生のことを説明できるか ･･･具体例をあげられるか	１枚目のプリント２ページ

		そういうものは釜山外大にはないですか？ 隣の人と釜山外大の学生がどんな生活を送っているのか話してみましょう。みんなが「わかる～！」って言いそうなことを思い出してみてくださいね。難しかったら韓国語でもいいです。（5分ほどとる） ☆反応が薄い・話し合いが進まない→ヒントを出す。 話し合いの様子を見て、下の欄に書くよう指示。詳しい内容を分かりやすい順番で書くように言う。 時間になったら休憩		
宿題	書く課題が終わらなかった人は家で書いてくる			

日時	2018年9月14日（金）		15:00 ～ 15:50	
氏名	F		指導教員	
対象者	B1-2クラス（CJP122－01受講者21名）		授業時間	50分
授業の目標（課題）	理解：他人の自己紹介やその人の身近な人の特徴（好き嫌い、得意・不得意）を聞いて、理解することができる。 やりとり：自分や身近な人々の特徴（好き嫌い、得意・不得意）について、複数の例をあげたり、エピソードを交えたりしながらやりとりができる。 表現：自分や身近な人々の特徴（好き嫌い、得意・不得意）について、複数の例をあげたり、エピソードを交えたりしながら表現することができる。 →自分の大学の学生の特徴を反映させたゆるキャラを作ることができる			
指導項目	ゆるキャラの特徴と作り方・具体的な説明をどのようにすればいいか			
時間	活動ごとの目標（課題）	活動	活動ごとの評価ポイント	教材／教具
20分	・ゆるキャラに必要な要素を理解する ・グループワークで行うことについて理解する	場面４：釜山外国語大学のゆるキャラを作ることになりました。グループで話し合って、ゆるキャラを作ってください。 ☆ゆるキャラの説明とグループワークの説明 （S16）場面の確認をする。全員で読む。 ゆるキャラの確認および説明 （S17）この子のこと覚えてますか？　何の動物ですか？　など学生に聞いていく。 （S18）ゆるキャラの「ゆる」、特徴など （S19）ゆるキャラに必要なこととは？ 学生に聞き、答えを板書していく。 →身近なキャラクターになることが必要 （S20）大学キャラクター「きいちゃん」の説明 →お茶大に関係することが特徴に入っている。 （S21）あなたの大学のゆるキャラを作りましょ		２枚目のプリントを配る。 ２枚目のプリント１ページを使用

		う。 （S22）お手本の提示：ペダルマン （S21）ルール説明		
30 分	・自分の大学の学生の特徴をキャラクターに反映させる	☆グループでゆるキャラを作る。 活動の流れ ・場面３で考えた特徴を見返し、どんな特徴を盛り込むかを考える。 ・係を分担し、作業を進める。 ＊各グループを回り、作業の進行をフォローする。 ・最後の 10 分は発表の時間に充てる。	・学生の特徴をキャラクターに反映させることができるか ・キャラクターの各特徴について具体的な例を考えられるか	ゆるキャラについてまとめるための紙を配る。 ペンは前に置いておき、使いたくなったら持っていってもらう。
宿題	なし			

【学生が作成した教案　日本語 B2-1　Gさん】

１コマ目

日時	2018 年 9 月 10 日（月）		15:00 ～ 16:50	
氏名	G		指導教員	
対象者	B2-1		授業時間	100 分
授業の目標（課題）	住居に関する記事を読んだり聞いたりして理解できる。 自分が将来住んでみたい家や周辺環境について説明し、具体的な理由や例を混ぜながらやりとりができる。			
場面	北海道で起きた地震の後、Twitter を見ていたら、下にある絵（地震対策の絵）がたくさん出てきました。どうしてこのような絵が流れているのか不思議に思っているところです。			
時間	活動ごとの目標（課題）	活動	活動ごとの評価ポイント	教材／教具
10 分	出席確認・自己紹介			
10 分	目標説明 ウォーミングアップ	日本のどこに行ったか、日本で自然災害を経験したことはあるか、３人で話す。	トピックに興味を持てるか。	プリント
25 分	新聞記事を読む	自分で読んでもらう（5分） ３人で話して理解する（5分） みんなで内容を確認（15 分）	漢字が読めるか。 記事の内容を理解できるか。	
５分	記事に関する問いに答える。	３人で話す（３分）何を話したか聞く（２分）	記事の内容を理解できるか。	
10 分	～休憩～			
20 分	地震対策をした部屋	部屋の絵を見てもらい、３人で部屋の様子について考えてもらう（５分） どんなことを話したのか聞く、なぜ絵のような部屋になっているのかの説明（10 分） 防災対策の絵の穴埋めと答え合わせ（５分）	予測することができるか。 様々な地震対策の方法と意味を理解できるか。	
５分	グループで話してみよう。	家で災害対策をしているかや、災害対策が必要なのか話す（３分）話したことを聞く（２分）	自分の意見を持って話せるか。	
５分	他の災害対策の紹介	他にどのような災害対策があるのか見られるサイトやアプリを少し紹介する。	興味を持てるか。	
19 分	「住みたい街ラ	場面の確認（２分）	ニュースの内容を理解	

	ンキング」のニュース（将来住みたい家や周辺環境について考える準備）	「住みたい街ランキング」のニュースを見てもらう。（２分） ニュースに出てきた言葉の意味を確認（５分） もう一度ニュースを見て見る（２分） ニュースに関する問いを３人で考える（５分） 話した内容を聞く（３分）	することができるか。	
１分	次回の連絡	次回、漢字テストをすることを伝える。		
宿題				

２コマ目

日時	2018 年 9 月 13 日（木）		14:00 ～ 15:50	
氏名	G		指導教員	
対象者	B2-1		授業時間	100 分
授業の目標（課題）	自分が将来住んでみたい家や周辺環境について説明し、具体的な理由や例を混ぜながらやりとりができる。 住居や周辺環境についてまとまった内容を、正確で適切な語句や文を使って表現できる。			
場面	就職をするのをきっかけに、新しいマンションに引っ越した大学の先輩の家に遊びに来ました。新しい家での生活はどうかと尋ねているところです。			
時間	活動ごとの目標（課題）	活動	活動ごとの評価ポイント	教材／教具
10 分	出席確認・ウォーミングアップ	出席確認（１分）目標確認 ペアで話す（３，４分） 話した内容を聞く（３分）		プリント
15 分	住みたい家や周辺環境についてやりとりができる。	場面の確認。 ロールカードを使ってやりとりをする。	自分の役割を理解してやりとりができるか。 話を続けようとすることができるか。	ロールカード
10 分	部屋探しの条件を考える。	部屋探しをするときの条件を考える（３分） 書いた内容をペアで話す（３分） 何を書いたのか答えてもらう（４分）	自分が住んでみたい家や周辺環境について考えることができるか。	
15 分	将来住みたい家や周辺環境について考える。	例を出して説明する（４分） どんな家に住みたいかやどんな場所に住みたいかを考える（５分） 書いた内容をペアで話す（５分）		
10 分	～休憩～			
15 分	作文の書き方のミニ講座			
15 分	将来住んでみた	１時間目で考えたこと	作文の書き	

	い家についての作文を書く。	をもとに作文を書く。	方を守って書けているか。	
10 分	書いた作文を発表する。	書いた作文を一人ずつ発表してもらう。		
７分	コメントペーパー記入	２日間の授業のコメントペーパーを書いてもらう。書いてもらっている間に、書いてもらった文章をチェックする。		
３分	最後のあいさつ	チェックした文章も間に合えば、返却する。		
宿題				

【学生が作成した教案　日本語 B2-1　Ｈさん】

１コマ目

時間	課題	活動	教材
5	挨拶、出席確認	**挨拶**： 今日から二回授業を担当させていただきます。 私の名前はまだ覚えていますか？ ありがとうございます。宜しくお願いします。 **名前を呼ぶ**： では出席を確認しますね。	
5	can−do−list 確認 授業の流れやペアの作り方の説明	**Can−do−list を PPT に載せて、学生に読んでもらい、授業の目標を確認する：** 授業を始める前に、まず今回授業の目標と流れを確認しましょう。 （指名して）「理解」を読んでもらえませんか？ 隣「やりとり」を読んでください。 はい、ありがとうございます。今回授業の目標は「理解」と「やりとり」です。 **授業の流れやペアの作り方を PPT に載せて説明する：** では、授業の流れやペアの作り方を説明します。 前半は住居、簡単に言うと部屋を中心とします。後半は周辺環境、つまり部屋の周りについて話します。 先週、松浦先生はペアを作りましたが、今回の授業で、できるだけ違う人とのコミュニケーションするチャンスを作るため、席が変わります。だから、ペンやノート以外のものをカバンに入ってくださいね。	PPT1 PPT2 PPT3
5	【導入】	**プリントを配る：** 今からプリントを配りますね。 まず、warming up として、「１、話しましょう」を見てください。 ①今住んでいる部屋はどのような部屋ですか。 ②その部屋をペアに紹介しましょう。 はい、では３分ぐらい話しましょう。 **話を聞く：** はい、(学生カードを抽選）〇〇さん、ペアがどのような部屋に住んでいますか？ そうですか。（ペアを見て）、〇〇さんの部屋はどうですか？ （臨機応変） （学生カードを抽選）〇〇さんたちはどうですか？ なるほど。 では、日本の部屋といったら、どういうイメージがありますか？ そうですね、和風（PPT を写す）部屋ですね。 ではプリントの「２」を見てください。	プリント PPT4

38	【理解】	**文章を読んでもらう　５分** （学生カードを抽選）〇〇さん、まず場面を読んでください。 はい、ありがとうございます。 みなさん、日本に旅行したことがありますよね。 その時はどんな部屋に泊まりましたか？　温泉旅館とか？ では、皆さん、文章のタイトルを読んでみてください。 はい、「和風建築と洋風建築のメリットとデメリット」。まず自分でこの文章を読んでみて、わからない単語や表現をマークしてください。５分くらい。 **ペアで意味確認　５分** そろそろ大丈夫ですか？ ペアとお互いにわからない用語を確認しましょう。辞書を調べてもいいですよ。 **意味確認　10 分** （学生カードを抽選）〇〇さん、第一段落を読んでください。 ありがとうございます。線をつけた単語は後ろに整理しましたよ。覚えて下さいね。 わからないところはありますか？ （なければ）ではチェックしますよ。「手に馴染む」はどんな意味ですか？ （このように残り部分の理解もチェックする） **ピアと一緒に考えましょう　５分** では、「考えましょう」の部分を見て下さい。 和風建築と洋風建築のメリット・デメリットは何ですか。 この文章を読んで、あなたは和風建築を借りたいですか。 それとも、洋風建築を借りたいですか。理由は何ですか。 ５分くらい、ペアと話してくださいね。 **話を聞く　10 分** はい、そろそろいいですよね。 和風建築と洋風建築のメリット・デメリットは何ですか？ （学生カードを抽選）〇〇さん？　まず、和風建築のメリット・デメリットは何ですか？ そうですね、簡単に言うと、和風建築のメリットは自然素材を取り入れることです。デメリットは耐震性能が良くないかもしれないですね。 洋風建築のメリット・デメリットは？ （学生カードを抽選）〇〇さん？　どうですか？ そうですね。洋風建築は大胆な構造と広い空間ができ、重厚感があります。しかし、スタイルが定着してしまい、また日本の街の雰囲気と合わないかもしれないですね。 次、「この文章を読んで、あなたは和風建築の家を借りたいですか。それとも、洋風建築の家を借りたいですか。」	プリント

		和風建築の家を借りたい人？（手をあげた人を指名する） なぜですか？ なるほど。じゃあ、洋風建築の家を借りたい人？ （指名する）どうしてですか？ 50 分になりましたので、10 分休憩しましょう。	
10	休憩		
17	【導入】	**後半の授業の説明：** 全員戻りましたか？　はい、後半の授業で部屋の周辺環境について話しましょう。 **私が住んでいるところ「池袋」を紹介する：** 私は、東京に留学しています。ここに住んでいます… クイズーここはどこですか？ 正解。「池袋」です！池袋はどんなイメージですか？池袋に行った人？（手をあげる） そうですね。池袋は…（学生の話をリピートする） 西武などのデパートだけではなく、ドラックストアなども多くて、買い物が便利ですよ。 近年、おしゃれなカフェも多くなりました。週末に友達と一緒にカフェ巡りすることも楽しいですよ。（カフェ巡りってわかります？　意味確認） 池袋には人気の水族館もあります。ちなみに、私は年間パスポートを作りました。３千円で毎日いけます…コスパ高いね（コスパってわかります？　意味確認） 池袋の北口にたくさんの中華料理店があります。私は絶対週一回北口に行きます。 はい、以上が私が住んでいるところの紹介です。 **話しましょう：** では、プリントの３を見てくださいね では、みなさん今住んでいるところの周りはどういう感じですか。 ペアに紹介しましょう。 **話を聞く：** そろそろいいですか？　学校に住んでいる人？（手をあげて） 学校の周りはどうですか？ 他の人はどうですか？（手をあげなかった人を指名する） なるほど。では、プリントの４を見てくださいね。 誰か読んでもらえますか？ ありがとうございます。	PPT5 PPT6 PPT7 PPT8 PPT9 PPT10 PPT11 プリント
30	【やりとり】	**語彙確認：10 分** 今じゃなく、将来の話ですよね。 やりとりする前に、まず参考語彙を見てくださいね。読んで簡単に説明しましょう（席順番で） **ペアで話す　10 分**	プリント

		では、**ペアと**話しましょう。参考語彙を使ってもいいし、それ以外の言葉を使ってもいいですよ。5 分くらい **話を聞く　15 分** はい、ちょっと聞きましょう。 （席順番で話を聞く）	
3	アンケート	最後は授業のアンケートを書いてください。 （アンケート回収） では今日の授業はここまでです。ありがとうございます。また水曜日。	アンケート

２コマ目

時間	課題	活動
2	出席確認、挨拶	**名前を呼ぶ**： みなさんこんにちは、今日も宜しくお願いします。 では出席を確認しますね。
2	授業の流れ	**授業の流れを PPT に載せて説明する：** では、授業の流れを説明します。 前半はまず月曜日の残りの部分を終わらせ、そして周りの環境に関するニュースを聞いて理解します。後半はグループ活動です。
15	【やりとり】	**先週の内容を呼び戻す：２分** みなさん、月曜日のプリントを持ってきましたか？ 先週は何についての文章を勉強しました？ そうですね。 では４のところを見てくださいね。 **語彙確認：５分** 今じゃなく、将来の話ですよね。 やりとりする前に、まず「参考語彙」を見てくださいね。読んで簡単に説明しましょう（席順番で） **ペアで話す　３分** では、ペアと話しましょう。月曜日のペアと一緒に座ってください。参考語彙を使ってもいいし、それ以外の言葉を使ってもいいですよ。３分くらい **話を聞く　５分** はい、ちょっと聞きましょう。
30	【理解】	では、今日のプリントを配りますね。 今日は周辺環境がメインですよ。 日本のニュース見ますか？　ネット、テレビ？ じゃあ今日はちょっと周辺環境に関するニュースを見ましょう。 １のところ〇〇さん読んでみてください。 プリントを見てください、〇〇さん、１を読んでもらえませんか はい、聴解練習です。 ニュース全体を一生懸命に聞くわけではなく、大切なところで私は一回ストップして、「ここから集中して聞いて、書いてください」って、再開します。 私は音声を用意しますので、みなさんはまず全体的に文章を読んでください、１分くらい では、ニュースを流しますね。 これはディクテーションではなく、理解を確認するための練習です。なので、聞こえることとプリントは全く一緒ではないです。 音声を流す　５分 …これから集中して聞いてください。 **ペアでチェックする３分** どうですか？難しいですねーでは、まずペアでチェックしましょう。お互いにわからないところを聞きましょう。３分くらい

		正解を示し、理解をチェックする　10 分 〇〇さん、第一段落を読んでもらえませんか みなさん、意味大丈夫ですよね？　ありがとうございました。 では、〇〇さん、次の段落お願いします。 （このように意味をチェックする。わからない語彙や表現を説明する） **ビデオを流す　５分** 何か質問がありますか？　大丈夫ですか？ では、もう一回ニュースを見ましょう。
10	休憩	50 分になりましたね。 では、10 分休憩しよう。
50	【表現】	みんな戻りましたか？ 早速ですが、プリント２のところを見てくださいね。 〇〇さん、読んでください。 はい、有難うございます。 韓国では平均的に何歳ぐらい結婚しますか？（中国もきく） **意味チェック　５分** 活動する前に、参考資料の部分を見てください。 意味はわかりますか？では、順番にチェックしましょう。 はい、これを参考として、活動してくださいね。 では今からワークシートを配ります。 **一人でワークシートに記入する　５分** まずは一人でワークシートに記入してください。 文章ではなく、箇条書き、メモでいいです。５分くらい。 **グループを分けて、活動する。15 分** 終わりましたか？ じゃあ、三人ずつのグループになって、グループ内で発表してください。 **発表　15 分（臨機応変）**
5	挨拶と アンケート	では、今日の授業はここまでです。 みなさん、お疲れ様でした。 これは私の SNS です。例えば、日本に留学したい時、東京あるいは中国に旅行したい時、何か聞きたいことがあれば、気楽に話してください！ 今回は私の人生の中で、初めての授業です。中国人が韓国で日本語を教える、本当に不思議だと思います。ドキドキして、一生忘れない経験です。 昨日のアンケートを見ました。コメントのところで、先生頑張ってください！ファイティン！みなさん優しいなぁーありがとう！ 私、これからも、素晴らしい日本語教師を目指して、頑張ります！ この二日間、本当にありがとうございました！ 最後、アンケートの協力お願いします。（アンケート回収）

【第２回日韓学生フォーラムハンドアウト】

シティズンシップ教育としての
複言語・複文化プログラム分析

Shin Moriyama（Ochanomizu University）
moriyama.shin@ocha.ac.jp

1

2

釜山外大 vs. お茶大

- 2007～　TV会議システムによる国際合同授業開始
  （当時『国際新聞』に掲載）
- 2009～　多言語・多文化サイバーコンソーシアム
- 2012～　国際学生フォーラム
- 2015.12 国際学生フォーラム
  （in Korea）
- 2016.7　学術交流協定締結
- 2016～　複言語・複文化プログラム

3

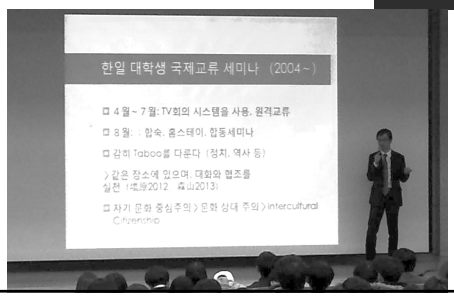
釜山外大がなぜ魅力的か？

- 日韓をつないできた釜山にある
- 日本語教育が世界一さかんな大学
- 鄭起永総長のヴィジョン
- アジア共同体研究所とアジア共同体論
- CEFRに基づいた日本語教育
- 複言語・複文化プログラムが可能

BUFS

4

アジア共同体論



5

釜山外大と共に行いたいこと

- 過去を乗り越え、韓日、そして東アジアを共生に導くパートナーとなる
- 東アジアが共に生きるための言語教育を考える

6

1. はじめに

- 東アジアにはEUのような、ともに生きるための地域連合体がなく、それをめざすための教育理念や教育政策も存在しない
- 各国首脳の政策・談話：国家間の対立を政治によって解決できるという実感も感じられない
- 日韓、東アジアがともに生きることをめざし、2016年度から「複言語・複文化プログラム」を立ち上げた
- 本研究：その内容について紹介＞成果と残された課題

7

2. 先行研究
～ヨーロッパ～

Byram（2008）：

- 国語教育：ナショナル・アイデンティティ（第二次社会化）
- 外国語教育：ナショナルな視点を脱中心化・相対化＞超国家的なアイデンティティ構築＞超国家・文化的シティズンシップ（第三次社会化）

言語能力＋文化教育＋政治教育

8

2. 先行研究
～ヨーロッパ～

- Byramの主張が正しいとすれば、新たな形態の外国語教育の推進は、東アジア諸国がともに生きるために必要な、超国家的なアイデンティティやシティズンシップの構築に寄与
- Byram, et al.（2016）などで実証的な研究事例がある

しかし、

- 十分とは言い難い
- そのまま東アジアにも応用可能であるといえる保証もない

9

2. 先行研究
～東アジア～

- 「ともに生きる」ための外国語教育実践：

森山の一連の教育実践、九州大学の日韓海峡圏カレッジ、アジア太平洋カレッジなど

- 研究：

森山（2016）など少なく、ほとんどが実践報告の次元

＞その成果を客観的、実証的に提示したり、東アジアがともに生きるための言語教育政策の基礎研究としたりするには限界

10

2. 先行研究
森山の実践活動一覧

- 日韓大学生国際交流セミナー（日韓、2004年～）
- 国際学生フォーラム（8か国、2012年～）
- サイバーコンソーシアム結成と国際共同授業（8か国、2007年～）
- 豪・米・独における日本語教育実習（2012年～）
- 韓国における複言語・複文化教育プログラム（日韓、2016年～）
- 東アジアの共生を目ざす日韓学生フォーラム（日韓、2017年～）
- 北米地域との青少年交流事業（日米、2014年）

＊各報告書はhttp://www.li.ocha.ac.jp/ug/global/mrs/で公開

11

3.複言語・複文化プログラム概要

- 2017年8月7日～9月16日、釜山外大で実施
- 参加学生：8名
- 韓国語・文化研修＋日本語教育実習
- 事前学習：

⑴複言語・複文化主義

⑵Intercultural citizenship教育としての外国語教育

⑶ヨーロッパ言語共通参照枠（CEFR）

12

4.研究方法

- データ収集：プログラム終了後、レポートを提出

① 韓国のことばと文化を学んで

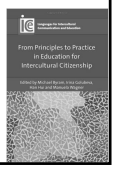
② 日本語教育実習

③ 複言語・複文化教育プログラムについて etc.

- 分析方法：

① SCATなどを用い質的に分析

② Byram, Barnettの枠組みでの成果の考察



13

5.結果と考察
5.1プログラムの成果

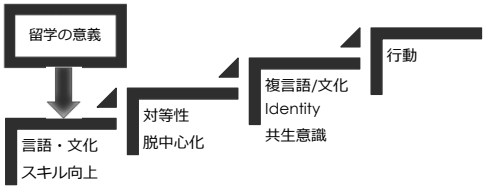
抽出された概念

① 現地で学ぶ意義
② 韓国語学習の向上
③ 韓国文化への理解
④ 言語学習から異文化理解へ
⑤ 双方向性・対等性
⑥ 脱中心化
⑦ 複言語・複文化能力
⑧ 超国家的identityの獲得・共生意識の深まり
⑨ 将来の行動への動機づけ

①を除き、4つの段階

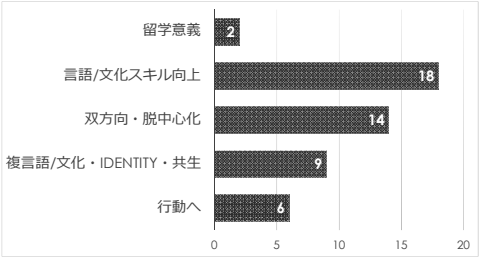
14

5.結果と考察
5.1.カテゴリ化と分布



15

5.結果と考察
5.1 カテゴリ化と分布



16

5.2 プログラムの成果
5.2.1 留学の意義

①現地で学ぶ意義：

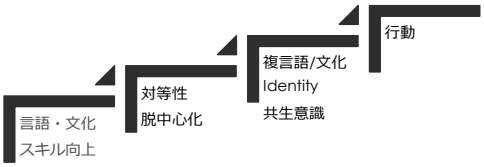
「現地で学ぶことの重要性」

「実感を伴った学び」

＞韓国に行き、実体験を伴った学びの意義が報告

17

5.2 プログラムの成果
5.2.2 韓国の言語・文化のスキル向上



18

5.2 プログラムの成果
5.2.2 韓国の言語・文化のスキル向上

②韓国語学習の向上：

「動機づけの強化(2)」　　cf.(2)=2回答

「学習意欲の向上」

「韓国語で思考できるようになる」

「伝えようとする積極性の付与」

など、韓国語の向上が見られた

19

5.2 プログラムの成果
5.2.2 韓国の言語・文化のスキル向上

③韓国文化への理解：

「差異の気づき(2)」

＞「異文化を受容することの困難性」

＞「ステレオタイプの打破」「負のイメージ払拭」

＞「魅力の実感」「親近感の増進」

「親睦の深化」「相互理解の深化(2)」

＞気づき・困難・克服を経て理解へ

20

5.2 プログラムの成果
5.2.2 韓国の言語・文化のスキル向上

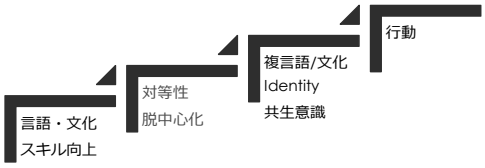
④言語学習から異文化理解へ：

「言語学習から異文化理解への正の影響」

＞言語を学ぶことで文化理解が深まった

21

5.2 プログラムの成果
5.2.3 対等性・脱中心化



22

5.2 プログラムの成果
5.2.3 対等性・脱中心化

⑤双方向性・対等性：

「双方向的姿勢の堅持」

「言語学習の双方向性」

「双方向の交流により言語教育に対する認識の変化」

「教師から学生への一方向からともに学ぶ教育へ」

＞プログラムの双方向性、対等性は「脱中心化」を促進

23

5.2 プログラムの成果
5.2.3 対等性・脱中心化

⑥脱中心化：

「自文化の客体化」

「自他文化を客観的に見つめる視点」

「視点の多様性の認識(2)」

＞自文化を脱中心化、客体化、自他の文化をクリティカルに見つめる

24

5.2 プログラムの成果
5.2.4 複言語/文化・Identity・共生意識

25

5.2プログラムの成果
5.2.4複言語/文化・Identity・共生意識

⑦複言語・複文化能力：単にスキルの問題ではなく意識変化

「複言語・複文化能力の向上」

「複言語・複文化環境の重要性の実感」

「複言語・複文化主義を体験」

「複文化についての達成感」

26

5.2プログラムの成果
5.2.4複言語/文化・Identity・共生意識

⑧超国家的アイデンティティの獲得・共生意識の深化：

「超国家的アイデンティティの獲得」

「東アジア人としてのアイデンティティ構築」

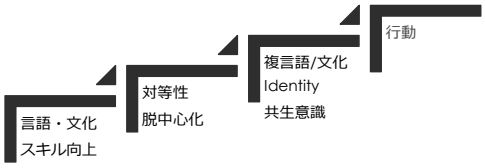
「心理的距離の縮まり」

「ともに生きたいという思い増加」

＞超国家的identity構築、共生意識が芽生え、深化

27

5.2 プログラムの成果
5.2.5 行動へ



28

5.2 プログラムの成果
5.2.5 行動へ

⑨将来の行動への動機づけ：

こうした自己意識の変化は、将来の行動へと発展

「架け橋としての行動の動機づけ付与」

「交流促進行動の開始(3)」

「関係改善の行動への着手」

「日本語教師の魅力の実感」

29

5.3 残された課題
5.3.1 自分自身に対する課題

「韓国に対する理解不足」

「韓国語使用に対する積極性の不足」

30

5.3 残された課題
5.3.2 プログラムに対する課題

■ 言語教育プログラムに対してする課題：

「日韓の言語的対等性の欠如」

「韓国語の言語使用の機会の欠如」

「韓国語プログラムと日本語教育実習プログラムの一体性の弱さ」

■ シティズンシップ教育（政治教育）プログラムに対する課題：

「日韓関係の難しさの再認識」

「共生を考える場・時間の不足」

「反日・嫌韓学生を巻き込んだ交流の必要性(4)」

31

6.シティズンシップ教育としての日本語教育へ

Byram et al.(eds.) (2016)
From Principles to Practice in Education for Intercultural Citizenship

- Byram（2008）：文化を超えたシティズンシップ教育

Pre-political Level（2段階）

⑴他者と関わる＞「当然」をクリティカルに見つめ直す

⑵＋代案・変化について提案・想像

Political Level（3段階）

⑶＋自身の社会で変化を起こすために行動する

⑷＋他者とともに超国家的共同体を建設する

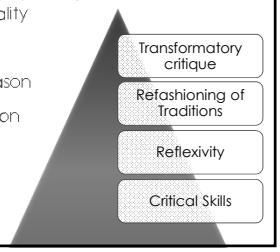
⑸＋超国家的共同体として共通の課題明確化

32

6.シティズンシップ教育としての日本語教育へ

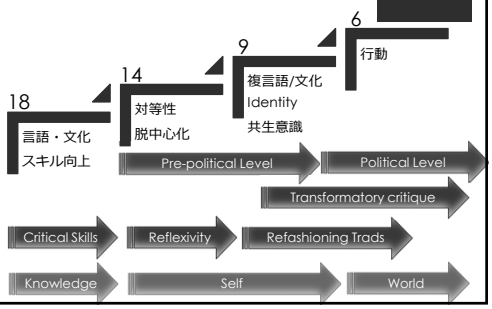
Byram et al.(eds.) (2016)
From Principles to Practice in Education for Intercultural Citizenship

- Barnett（1997）グローバル社会に求められるCritical beingとなるためのCriticality
- 3領域 x 4段階
- Knowledge：Critical reason
- Self：Critical self-reflection
- World：Critical action



33

6.Citizenship教育としての日本語教育へ



34

6.Citizenship教育としての日本語教育へ

- Byram

・Pre-political Level：他者と関わり、⑴クリティカルに考え、⑵代替を模索・提案する

＞概ね達成

・Political Level：他者と関わり、⑶自分の社会で行動、⑷国を越えて共生、⑸共通の課題の明確化

＞十分とは言えず

語学研修＋教育実習であったため

＞しかし、未来における着想＞実際に行動に至る事例も

35

6.Citizenship教育としての日本語教育へ

	Knowledge	Self	World
⑷Transformatory Critique	○	?	? ?
⑶Refashioning of Traditions	○	○	?
⑵Reflexivity	○	○	○
⑴Critical Skills	○	○	○

＊但し、何人かは明らかにその後の人生設計に影響及ぼす

36

7.おわりに

複言語・複文化プログラムについての評価

- 複文化的側面：概ね「達成できた」
- 複言語的側面：「韓国語使用場面の不足⑵」＞不十分
- Citizenship教育（政治教育）の側面：「日韓学生フォーラム」を実施したものの、日常生活でタブーとされる問題について扱われる場面は少なく課題を残した

＞全員をして「超国家的アイデンティティの構築」「東アジア人としての自覚」「共生意識の芽生え」「政治的行動の段階」「Criticalityの創造的段階」に至らなかった原因か

＞これらが克服されていけば、東アジアがともに生きるためのシティズンシップ教育、共同体建設の土台となる、言語教育プログラムとなりうる？

37

◀参考文献▶

- Barnett, R. (1997). *Higher education: A critical business*. McGraw-Hill Education (UK).
- Byram, M. (2008). *From Foreign Language Education to Education for International Citizenship*. Multilingual Matters.
- Byram, M., Golubeva, I. Hui, H. and Wagner, M. (eds.) (2016). *From Principles to Practice in Education for Intercultural Citizenship*. Multilingual Matters.
- 森山新（2016）「第15章 シティズンシップ教育としての複言語・複文化教育」『第二言語としての日本語習得研究の展望：第二言語から多言語へ』ココ出版

Table 8.1 Levels, domains and forms of critical being

	Domains		
Levels of criticality	*Knowledge*	*Self*	*World*
4. Transformatory critique	Knowledge critique	Reconstruction of self	Critique-in-action (collective reconstruction of world)
3. Refashioning of traditions	Critical thought (malleable traditions of thought)	Development of self within traditions	Mutual understanding and development of traditions
2. Reflexivity	Critical thinking (reflection on one's understanding)	Self-reflection (reflection on one's own projects)	Reflective practice ('metacompetence', 'adaptability', 'flexibility')
1. Critical skills	Discipline-specific critical thinking skills	Self-monitoring to given standards and norms	Problem-solving (means–end instrumentalism)
Forms of criticality	*Critical reason*	*Critical self-reflection*	*Critical action*

【総評】

日韓がともに生きる起点となれ

森山新（お茶の水女子大学）

「日韓大学生国際交流セミナー」は、今年で 13 回目を数え、戦後ヨーロッパを戦争から共生へと導いた「複言語・複文化主義」の考え方に基づき、韓国の言語と文化を学び、日本の言語と文化を教えながら、東アジア人としてのインターナショナルな人材を育成するプログラムとして実施されている。

今回の学生たちは、初めての教育実践にもかかわらず、初めてとは思えない堂々とした態度で、実践を行なっていた。その背景には皆が実習に備え一生懸命準備した結果であるに違いない。また今回参加した８名のうち７名は学部生で、彼らは日本語教育副プログラムの「日本語教育法演習」か、グローバル文化学環の実習科目「多文化交流実習」でこのプログラムに参加しているが、今年度は７名のうち５名が「日本語教育法演習」で参加していることが、学生の関心を日本語教育実習に向けている原因となっているのかもしれない。またそれに加え、回を重ねるごとに、事前学習、指導教員の指導、報告書などを通じた情報提供（教案、資料の作り方など）が功を奏してきたのかもしれない。

今回の実習授業では、前半に学んだ韓国語の知識を活用していた学生が何人かいた。学習者の母語に対する理解は学習者の置かれた立場を理解する上で重要であり、それを教師が活用するということは、学習者にわかりやすい説明を提供したり、まちがいやすい点に注意を向けたりでき、教育の向上につながる。また自身の学習者としての経験、とりわけ学習者の言語を学ぶ経験は、目の前の学習者のおかれた様々な状況や苦労を知る上でも重要である。さらに、単に実習生たちが自分は「教える者」として立場を固定することなく、ある時は教え、ある時は学ぶという双方向の立場に置くことで、お互いを対等に見つめることにもつながる。これは、互いの人権、言語、文化を尊重する民主主義的な市民性（シティズンシップ）の育成にもつながる。その意味で、本学が前半にまずは学習者の言語を学び、その上で日本語教育実習を行うという複言語・複文化プログラムとして実施していることは、外国語学習、異文化理解、教育実習に加え、言語・文化を超えたシティズンシップ教育として、非常に意義があると言えよう。本プログラムを履修した学習者が、ある者は日本語教育者として、またある者は東アジアの交流、外交に関わる者として成長していくこととなろうが、ここで学んだ言語・文化を超えたシティズンシップを発揮し、東アジアがともに生きるための役割を果たしてほしいと切に願っている。

釜山外大とは 2016 年に国際学術交流協定が締結されたが、交流は 2007 年より始まっていた。2007 年から毎学期 TV 会議システムを活用した国際合同遠隔授業を行い、両国に横たわる様々な問題、ステレオタイプ、コンフリクト、アイデンティティなどを日常的に取り扱ってきたのをはじめ、2011 年度からは、東日本大震災に端を発し、釜山外大からも学生を招き、世界８か国の学生が本学に一堂に会し、毎年「国際学生フォーラム」を開催、世界の災害に若者は何ができるかを話し合った。2015 年には、戦後 70 年、日韓国交回復 50 周年を記念し、本学の学生 35 名を連れて釜山外大を始め韓国の３つの大学を訪問し、両国の過去、互いの良さ、そしてともに歩む未来について話し合った。そうした両大学による一連の歩みの上に立っているからこそ、この「複言語・複文化プログラム」は、対立多き日韓と東アジアに、ともに生きる基盤を築く、新たな試みとして定着していくことを願いたい。

このプログラムが依って立つ「複言語・複文化主義」は、他の言語・文化を学ぶことを

通じ、母語と母文化を中心に今まで当然視していた価値観を相対化し、他の文化に関心と敬意を持つことで、ナショナリズムを克服し、ヨーロッパが、そしてアジアがともに生きるためのインターナショナルなアイデンティティ構築に寄与するとされている。もちろん、知識として、またスキルとして他の言語・文化を学ぶだけで、このような変化を引き起こすことは難しいであろう。しかし、それを積極的に促す交流の場を提供し、お互いに対する愛情と尊敬の気持ちを育み、正しい知識とナショナリズムを超えた視点に基づいて相互理解を深め、実際の行動を伴う全人的な交流を通じてであれば、対立を和解に、そして共生へと導く変化は着実に起こりうるということを今回のプログラムを通じて痛感している。

釜山の地はこれまで、日本と韓国の間にあって、いくつもの悲しみといくつもの喜びを経験してきた。豊臣秀吉の時代にはどこよりも先に日本の被害に合い、その後徳川幕府の関係修復により、朝鮮通信使派遣の起点となった。しかし植民地時代には、歌「釜山港に帰れ」にあるように、多くの民が日本へと連行される、悲しい別れの舞台となった。そうした悲しみを乗り越えながら、釜山は今、日本と韓国、そして東アジアをつなぐ基点として生まれ変わろうとしている。釜山外大には「アジア共同体研究所」が設けられ、毎年「アジア共同体論」という授業が行われている。また釜山外大は、ヨーロッパが欧州共同体建設のために策定した「ヨーロッパ言語共通参照枠（CEFR)」の指導法をいち早く採用し、日本語教育を行っている。私が釜山外大に注目し、協定締結にこぎつけ、交流を開始した理由がそこにある。

今回築いた重要な一歩を、今後さらに発展させ、近い将来、東アジアがともに生きる未来をこの学生たちの手で作りあげられることを祈り、期待してならない。

今回、このように貴重な進歩を遂げることができた背景には、様々な形でプログラムを提供してくださった、釜山外大の鄭起永総長、日本語創意融合学部の諸先生、国際交流チームのスタッフのご尽力があってのことである。この場を借りて心から感謝したい。

編集後記

今回が第 13 回となる日韓大学生国際交流セミナー。本報告書には、夏の２か月間の時間を韓国の協定校である釜山外国語大学校で過ごした実習生の生の声が詰まっている。実習生それぞれの立場や経験、目標とするもの、また成果として挙げているものはもちろん異なるが、実習のみならず、海外または母国へ新しい視点を持って飛び込んでいくことで得られたものは多いのではないだろうか。

特に本プログラムの軸となる複言語・複文化主義、釜山外国語大学の特徴である CAN-DO ステートメントに基づいた実習というのは、このプログラムならではのものであり、実習生の多くが迷いや戸惑い、そして期待などさまざまな気持ちを経て、大きな学びとして挙げている。修了レポートを読んでいると、実習生が何を学び、どのように成長していったかを知ることができる。

この報告書も、多くの方のご尽力によって発行に至った。実習と報告書作成に関わった全ての方に心から感謝を申し上げ、編集後記としたい。（森山）

～複言語・複文化教育と東アジア共生の可能性２～

～第 13 回 日韓大学生国際交流セミナー報告書～

発行年月日　2019 年 1 月 31 日

発　　行　お茶の水女子大学日本語教育コース・グローバル文化学環・国際教育センター

住所　〒112-8610　東京都文京区大塚 2-1-1

電話＆FAX　03-5978-5691

http://www.cf.ocha.ac.jp/gec/

発行協力　釜山外国語大学校

住所　〒462-34 釜山広域市金井区金泉路485-65

編　　集　森山新・野村琴菜・成歓（お茶の水女子大学）

印　　刷　よしみ工産株式会社

第13回日韓大学生国際交流セミナー